

地球環境危機の時代に対応した、自然の賑わいとともにある
持続可能な循環型都市構造の再生と創造
～100年後のたかつのまちのために～

「エコシティたかつ」推進方針 目次

1 「エコシティたかつ」推進方針について	1
(1) 「エコシティたかつ」推進方針策定の経緯	
(2) 「エコシティたかつ」推進方針とは	
(3) 方針の位置づけ	
(4) 計画対象区域	
(5) 計画期間	
(6) 計画の構成	
2 たかつのまち、地球温暖化の現状	5
(1) 高津区の地形と環境資源	
(2) 高津区の変遷とまちづくり	
(3) 地球温暖化の現状	
3 「エコシティたかつ」基本理念と基本目標	15
(1) 「エコシティたかつ」の基本理念	
(2) 「エコシティたかつ」実現のための基本目標	
4 「エコシティたかつ」の実現に向けた行動計画	18
(1) 基本的な考え方	
(2) 12のプロジェクト	
5 推進体制と計画の見直しの仕組み	23
(1) 「エコシティたかつ」推進会議の役割	
(2) プロジェクトの推進体制	
(3) 計画の検証・見直しの仕組み	
(4) 中長期的なプロジェクトの案	

6 これからの検討課題26

資料編28

- 資料1 「12のプロジェクト」に関する考え方
- 資料2 推進会議委員名簿
- 資料3 検討の経過
- 資料4 推進フォーラム・モデル事業等の実施概要一覧
- 資料5 用語の説明



高津区航空写真(2003年)

1 「エコシティたかつ」推進方針について

(1) 「エコシティたかつ」推進方針策定の経緯

2006（平成18）年からはじまった「高津区区民会議」では、高津区の課題について把握・整理を行い、審議を進めました。2007（平成19）年には、「環境まちづくり」を新たな審議課題に加えて審議し、次の3つの具体的な課題を設定しました。

課題① 環境問題に対する理解、普及啓発活動の必要性

課題② 身近な地球温暖化防止の取組の推進

課題③ まちづくりや活動を支える仕組みづくり

「環境まちづくり」は新たに選定された課題であるため、「高津区区民会議」での調査審議を継続しているとともに、今後の事業実施のあり方について審議中です。

「高津区区民会議」での調査審議を受け、区役所としてもこれからの持続可能な地域社会の形成に向け、市民・事業者・学校・行政などの多様な主体による協働の取組を推進していくことが不可欠であると考えます。

そこで、市内でのモデルケースとして、区内の地域資源を活用しながら持続可能な地域社会「エコシティたかつ」の形成に向けた事業展開を促進するために、推進方針を市民協働で策定することになりました。

(2) 「エコシティたかつ」推進方針とは

「エコシティたかつ」推進方針は、地球環境危機の時代において、高津区で顕在化している自然環境、社会環境、生活環境に関する諸課題に対し、地域の多様な主体が協力して、総合的かつ多面的に取り組むための計画要素を含んだ基本的な方針です。

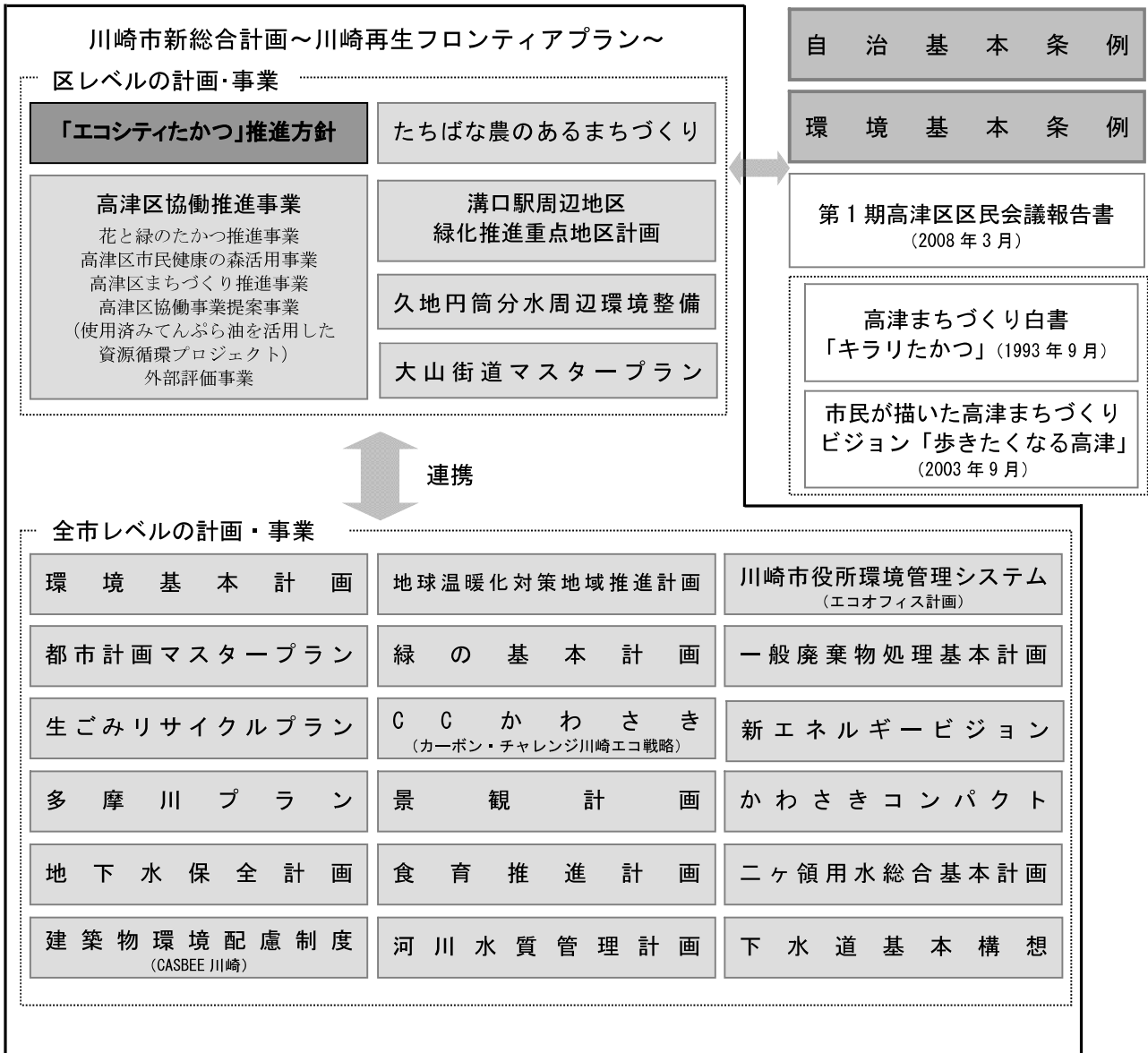
「エコシティたかつ」推進方針は、高津区で生活し、学び、働き、活動する様々な個人・組織が、地域社会の一員として「100年後のたかつのまちのために」行動するための指針となるものです。

地球環境危機の時代に対応し、自然の賑わいに溢れた持続可能な循環型都市「エコシティたかつ」の将来像を共有し、その実現に向けた目標と具体的な行動計画を示しています。

「エコシティたかつ」推進方針の策定には、区民、市民グループ、NPO、区内の学校関係者、区内の事業者、市（高津区役所をはじめとした関係課）の職員が参加しました。この推進方針に基づき、地域の多様な主体が、それぞれの立場から「エコシティたかつ」の理念に根ざした行動を起こし、積極的なコミュニケーションを進め、それぞれの行動が相互に響き合い、支え合うような取組をとともに進めます。

(3) 方針の位置づけ

「エコシティたかつ」推進方針は、自治基本条例、環境基本条例の趣旨を踏まえ、川崎市新総合計画（川崎再生フロンティアプラン）などの全市レベルの計画や、区レベルの計画・事業と連携した高津区の計画要素を含んだ方針です。



(4) 計画対象区域

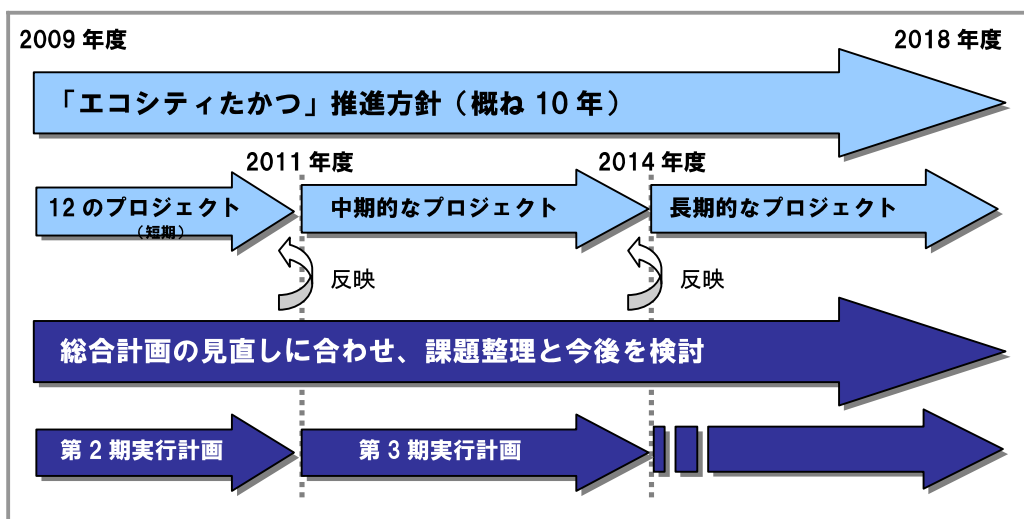
高津区の全域（17.1km²）を計画対象区域とします。なお、計画の推進にあたっては、同一流域界にある周辺区域（流域とは、雨の水が水系に集まる範囲）をも考慮した計画とします。



(5) 計画期間

推進方針の計画期間は、2009（平成 21）年度から 2018（平成 30）年度の概ね 10 年とします。そのうち、川崎市新総合計画「川崎再生フロンティアプラン」第 2 期実行計画期間内の 2 か年の取組を短期「12 のプロジェクト」として位置づけます。

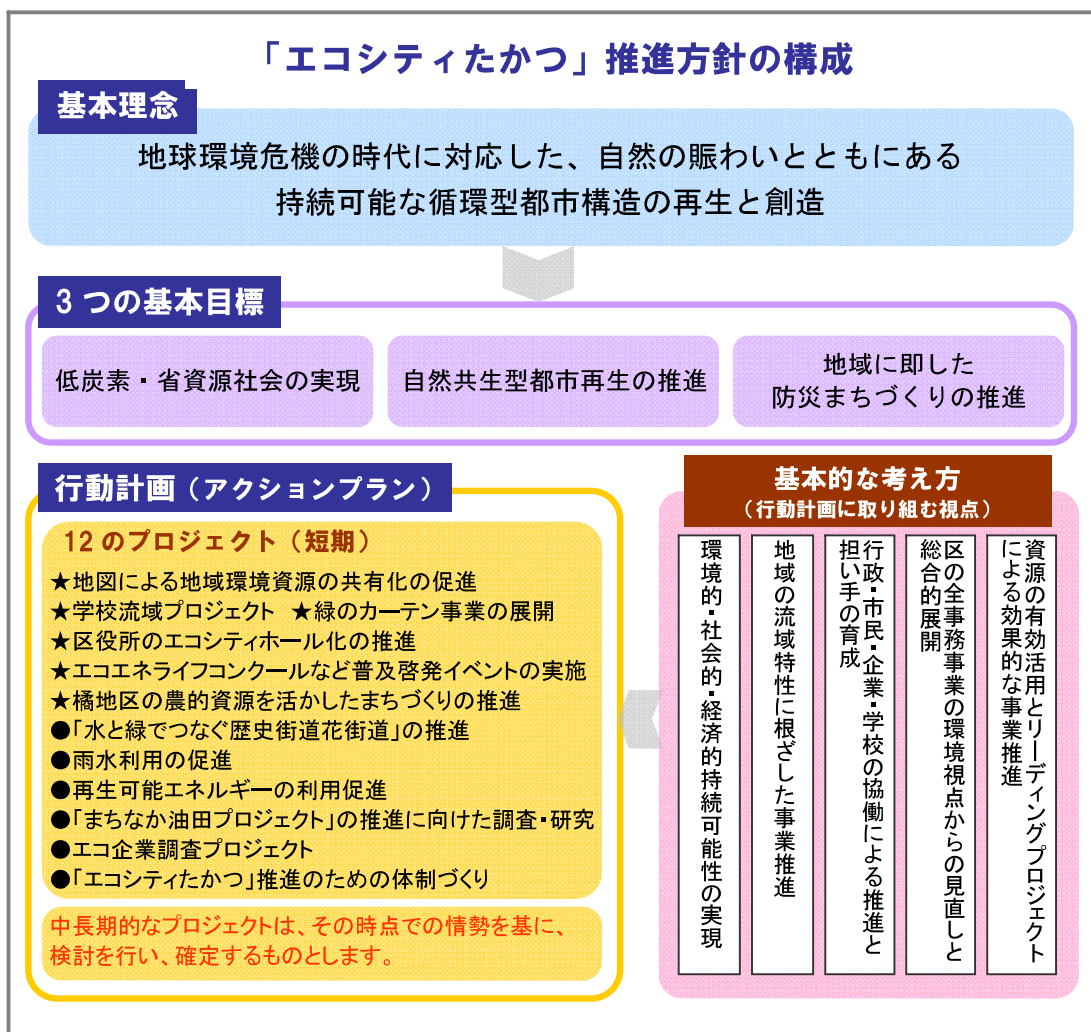
第 3 期実行計画期間以降の取組については、「中長期的なプロジェクトの案」とし、その事業内容を第 3 期以降の実行計画策定作業の中で検討し、その時点での情勢を基に検討し、その時点での課題に対応するために、推進方針を見直す中で確定します。



(6) 計画の構成

「エコシティたかつ」推進方針は、今後の急速な社会経済環境の変化の中においても、その変化に適切に対応し、計画の実行性を確保するために、計画の構造を「基本理念」、「基本目標」と「行動計画（アクションプラン）」とに分けています。

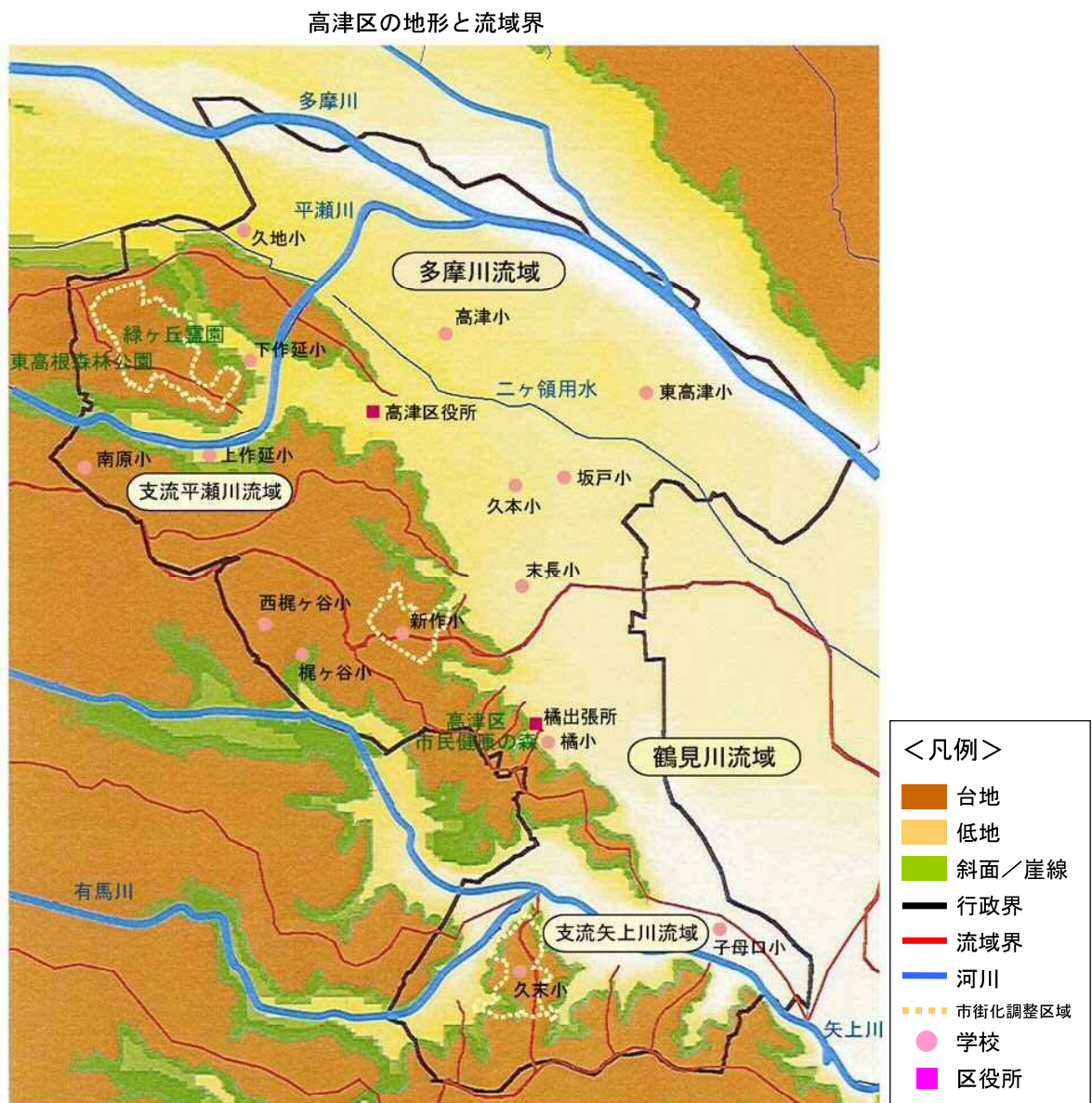
「基本理念」、「基本目標」は、高津区が多様な主体と協働で進める環境まちづくりの基本方針として、施策の基本方向を掲げる具体性を持った10年程度の計画とし、「行動計画（アクションプラン）」は、「基本理念」、「基本目標」の実現に取り組む施策の具体的内容及び目標を明示した3か年程度の計画としています。



2 たかつのまち、地球温暖化の現状

(1) 高津区の地形と環境資源

高津区は、南に広がる下末吉台地地域と北側の多摩川方向に開けた平坦地で構成されています。久末などの農地や、崖線にそった緑（斜面緑地）が多く残っており、多摩川や平瀬川、矢上川、二ヶ領用水などの水系にも恵まれています。



使用データ：国土地理院高密度10mメッシュ標高データ/国土基盤2万5千分の1地図

しかし、1960年代以降の活発な宅地開発により2007年には、川崎市の樹林地や農地は、1955年の18.3%まで減少しました。高津区に残されている緑は、ほとんどが斜面地に存する樹林地であり（2008年3月時点、68.8ha）、こうした樹林地をはじめとする、多摩川河川敷の緑地、久末、二子・諏訪、久地・宇奈根地区に残る農地や果樹園など、貴重な緑を保全することが求められています。また、緑の減少に伴い、生物の生息・生育空間も減少し、生態系への影響も懸念されています。

高津区的主要環境資源

土手からみた多摩川河川敷



22.2haの水と緑の広大な緑地がある。野球場やマラソンコースなどのスポーツ施設や、親子ひろばなどの多様な施設がある。様々な整備・保全事業が実施されている。

久地円筒分水



1941年建造。サイフォンの原理を応用し、久地二子堀、六ヶ村堀、川崎堀、根方堀、の四つに、常に一定の比率で分水している。1998年国の登録有形文化財になった。

高津区市民健康の森



「森」部分（約5.3ha）と、「丘」部分（約2ha）で構成。2007年4月、「丘」部分を「春日台公園」として一般開放。収穫祭やホタルの鑑賞会、小学校の体験学習なども行われている。

久末の農地



市街化調整区域内に10.9haの農地がある。主な生産物は、キャベツ、ブロッコリー、トマト、カリフラワー。若手の生産者が多く、農業が活発な地区である。

神庭緑地



約1.9haある神庭緑地は、特別緑地保全地区に指定されている。市民活動によってたけのこの盗掘による竹林荒らしを防ぐための柵づくりや竹の子間引き、薄刈り等の緑地管理が行われている。

データでみる環境資源データ

公園緑地

	高津区	全市
基幹公園	39.4	459.2
特殊公園	49.4	87.1
都市林	10.6	41.2
緑道	0.6	8.9
都市緑地	0.9	57.1
合計	100.9	643.6
市民一人あたりの公園面積	4.9	4.9
	206,161 人	1,345,306 人

*面積単位：ha *2007年3月31日現在

樹林地

	高津区	全市
A ランク	35.3	415.4
B ランク	33.0	229.1
C ランク	0.5	8.1
合計	68.8	652.6

*面積単位：ha *1,000m²以上の斜面緑地の現状

*ランクは、植生・地形等の自然的条件、歴史・景観等の社会的条件、上位計画等の計画条件を点数化し、分類したもの（A ランク：25～17点 B ランク：16～10点 C ランク：9～3点）

*2008年3月調査

農地

	高津区	全市
市街化区域内農地	71.7	472.1
市街化調整区域内農地	12.6	178.5
合計	84.3	650.6

*面積単位：ha *平成20年度固定資産概要調書（2008年1月1日現在）

湧水

高津区内合計	多摩川水系	鶴見川水系
106 か所	23 か所	83 か所

*2004年度調査

(2) 高津区の変遷とまちづくり

高津区の変遷と概況

高津区は川崎市のほぼ中央に位置する人口 211,348 人の都市です(2008 年 4 月 1 日現在)。江戸時代から二子の渡しを中心に、大山街道沿いの二子から溝口にかけて発達し、丘陵部には社寺が点在し、その周辺には農村地帯が広がっていました。また、この高津の地は、大山街道と水系の軸として重要な二ヶ領用水の結節点でもあり、その二つの軸が出会う大石橋周辺が、かつての高津のまちの中心部でもありました。

1925 (大正 14) 年の二子橋の架設、1927 (昭和 2) 年の玉川電気鉄道 (現在の東急田園都市線) の溝の口駅への乗り入れと南武鉄道の開通を契機に市街化が進みました。昭和初期には軍需産業の進展に伴い、武蔵溝ノ口駅周辺に精密機械や自動車部品など工場の進出が目立ち始め、同時に、勤労者向けの住宅開発が進み市街化が加速しました。

第二次大戦後は、東京への通勤圏として渋谷に鉄道で直結する立地条件から住宅の需要が大きく、大規模な土地区画整理事業により大規模住宅団地の開発が進みました。同時に、東急田園都市線の鷺沼駅以西への延伸や第三京浜道路、東名高速道路の開通など、急激な都市化を支える都市基盤の整備が進められてきました。

高度経済成長期の住宅中心の市街化に続いて、1979 (昭和 54) 年市民プラザ、1989 (平成元) 年にかねがわサイエンスパークがオープンし、さらに溝の口駅周辺では、1997 (平成 9) 年に再開発により大型商業施設が立地するなど、高津区の中心となる市街地となってきました。

高津区の就業状況 (2000 年国勢調査) をみると、区外に通勤通学する人が全体の約 70% を占め、特に東京都に就業先や通学先がある人が多くなっています。また、高津区の産業大分類別従業者数の割合をみると、製造業、卸売・小売業、サービス業が高くなっており、川崎市平均と比べると製造業の割合が特に高くなっています。

区民参加のまちづくり

高津区では、1993（平成5）年、他の区に先駆けて、区づくり白書「キラリたかつ」を作成しました。区民が自ら地域の現状と課題を拾い出し、将来像を描き、取り組むべき提案事業を掲げました。1999（平成11）年、「高津区まちづくり協議会」がつくられ、区民参加のまちづくりが本格的にスタートし、市民健康の森の箇所選定や推進計画の策定、協議会のホームページ作成など行いました。さらに、2003（平成15）年、「キラリたかつ」の成果を検証し、「高津まちづくりビジョン」を作成しました。10年後の高津区を見据え、新たに取り組むべきプロジェクトを抽出し、ポリシー（基本方針）やプロジェクト、マネジメント（運営の仕組み）の考え方をまとめました。

<たかつポリシー>

- (1) 歩きたくなるまちをつくろう
- (2) 高津らしさを共有しよう
- (3) 絞りこんだプロジェクトで、まちを描こう
- (4) 歴史を未来につなぐ“いま”を耕そう
- (5) 「新しい公共」の社会実験を積み重ねよう

<たかつプロジェクト>

歩きたくなる高津の道

みんなが行きたい大山街道～訪ねて楽しいにぎわいのシンボリストリート
残そう、創ろう、高津の緑～住んでよかった、緑の高津
取り戻そう、水のある暮らし～めざせ！子どもが泳げる川
耕そう、地域コミュニティ～地域の問題を解決する新しい仕組みづくり

2006（平成18）年からはじまった「高津区区民会議」では、高津区の課題について把握・整理を行い、2006（平成18）年度には「子ども・子育て支援」「放置自転車問題」「安全・安心のまちづくり」の3つを優先的に取り組むべき課題として選定し、審議を進めました。また、2007（平成19）年度には、「環境まちづくり」を新たな審議課題に加えて審議し、次の3つの具体的な課題を設定しました。

課題① 環境問題に対する理解、普及啓発活動の必要性

課題② 身近な地球温暖化防止の取組の推進

課題③ まちづくりや活動を支える仕組みづくり

「環境まちづくり」は2年次目に新たに選定された課題であるため、第一期（2年間）で終了することなく、調査審議を継続しています。

高津区区民会議では、これまで次のような取組を進めてきました。

- 学習会「地域からの地球温暖化対策について」の実施(2007年8月9日)
- 現地調査「水と緑のネットワークづくり」(2007年8月24日)
- 記念講演会・エコエネ座談会の開催(2007年10月1日)
- ゴーヤーによる「緑のカーテン大作戦」の推進

第4回区民会議（2008年3月13日開催）にて、友好自治体である那覇市から寄贈を受けたゴーヤーの種による「緑のカーテン大作戦」の先行的実施について協議・決定し、区民会議委員長名で、区内各町内会・自治会長に協力を要請しました。

モデル 200 世帯の推薦依頼、一般公募の 50 世帯と合わせて、計 250 世帯で展開、栽培講習会を開催しました。環境局による「緑のカーテン大作戦」と連携し、追加で種を 300 セット配布しました。この大作戦の一環として、区役所の緑のカーテンから採取されたゴーヤーを食材とした、区役所食堂での「区役所産ゴーヤーを食べよう」も展開しました。

区民会議の取組をひとりでも多くの区民に知っていただき、「区民とともに課題解決に取り組む区民会議」としての取組が広まっていくことが重要と考えます。

また、「川崎市都市計画マスタープラン高津区構想」では、計画策定に際し、つくる参加と決める参加の手続きを経ました。つくる参加では、前述の高津区まちづくり協議会委員や、町内会・自治会の推薦委員、公募委員などで形成される「都市計画マスタープラン検討委員会」により議論が重ねられ、「区民提案書」が取りまとめられました。

決める参加では、広く市民の意見を反映させたマスタープランとするために、素案説明会や素案の縦覧、パブリックコメント、案の縦覧等の都市計画決定に準ずる手続きを経て、最終的に、都市計画審議会に諮問し、その答申を受けて決定しました。そのため、「市民発意によるまちづくりルールの策定の指針」の性格を併せ持っているといえます。

都市計画マスタープランの実現・推進の基本的考え方は、2005（平成 17）年 4 月 1 日に施行された「自治基本条例」に沿っています。

計画の推進は、皆で共につくりあげたマスタープランを実現させるために、市民の役割、事業者の役割、行政の役割を整理しています。

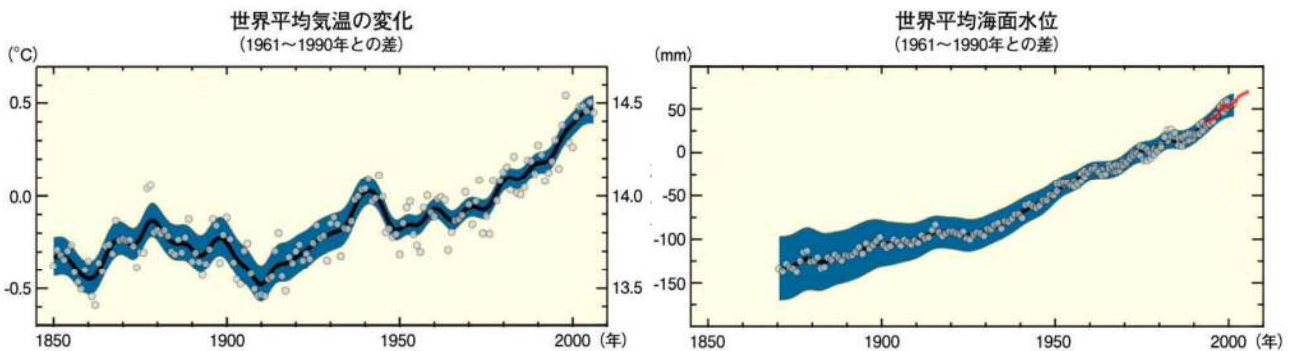
市民と行政が協働で取り組む事業については、地域の課題を発見し、解決していく「市民協働の拠点」として区役所が位置づけられているため、「区民会議」における調査審議やまちづくり活動を主体的に行う市民グループ等の実践を踏まえて、区や地域の課題解決や市民との事業展開に努めていきます。

こうした様々な参加のまちづくりに関する取組、市民自治の営みや記憶のひとつの延長線上に、今回策定した、「エコシティたかつ」推進方針が位置づけられるものといえます。

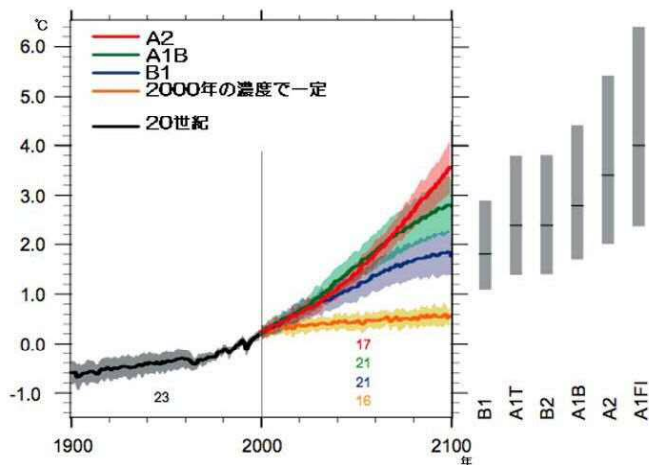
(3) 地球温暖化の現状

IPCC シナリオから見る地球環境危機

IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第4次報告書（2007年）によると、20世紀半ば以降に観測された世界平均気温の上昇は、人為起源の温室効果ガスの増加による可能性が非常に高いとされています。温暖化が進むと洪水や渇水、生態系・食料生産・健康への被害が増大し、今世紀末にはさらに2℃の上昇が不可避とも予想され、被害の大規模化が指摘されています。それら環境危機に対し、緩和策（温室効果ガス排出削減・吸収増加策）と適応策（気候変動のもたらす豪雨、土砂災害、渇水等の悪影響への対応策）の組み合わせによって、気候変化のリスクを低減すべきであると警告しています。



1900年から2100年までの世界平均地上気温の上昇（観測と予測）



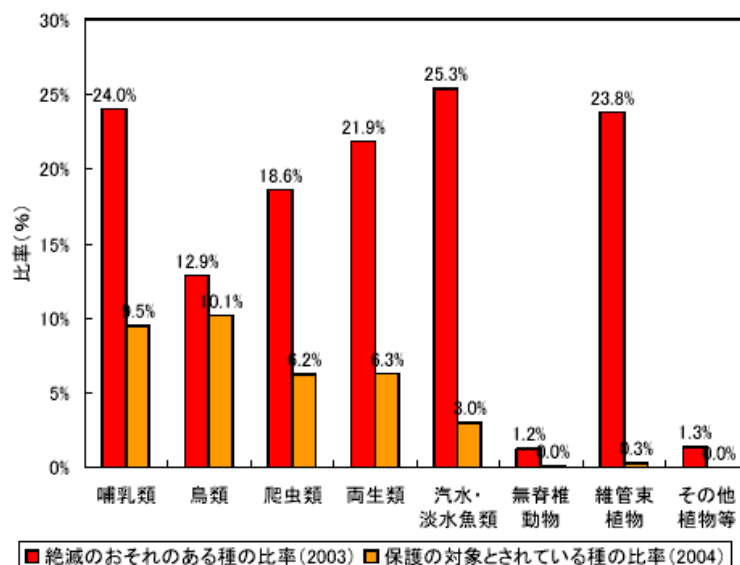
A1：高成長型社会 A2：多元化社会 B1：持続的発展型社会 B2：地域共存型社会

出典：IPCC 第4次評価報告書 2007（全国地球温暖化防止活動推進ホームページより）

生物多様性への影響

地球温暖化の進行等により、生態系の攪乱や種の絶滅など生物多様性に深刻な影響が生じることが危惧されており、人間生活や社会経済へも大きな影響を及ぼすことが予測されています。生物多様性条約（1993年）は締約国に対し、各国の自然資源に対する主権を認めつつ、能力に応じて保全ならびに持続可能な利用の措置をとることを求めるとともに、資源提供国と利用国との間での利益の公正かつ公平な配分を求めています。

日本における絶滅のおそれのある種類及び保護の対象とされている種類の比率



※多くの分類群において絶滅のおそれのある種の比率は、2割近くにも及んでいる

出典：環境省生物多様性センターHP、環境白書及び文化庁HPをもとに
国土交通省国土計画局作成

温室効果ガス排出状況

地球温暖化を止めるためには、現在、自然吸収量の約2倍に達している温室効果ガス排出量を、今後、自然吸収量と同等まで減らして、温室効果ガス濃度を安定化させることが必要です。

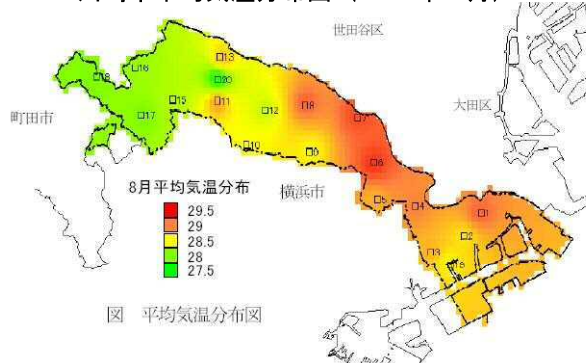
日本は、京都議定書において、2008年～2012年の5年間に、温室効果ガス排出量を1990年に対し、6%削減することを目標として決めました。しかし現状では、8.7%増加しています（2007年度速報値）。

川崎市では、2006年（速報値）の温室効果ガス排出量は1990年に対して8.9%減少しました。二酸化炭素について部門別の状況を見ると、排出割合では産業部門が8割近くを占めていますが、増び率では産業部門は減少に転じている一方で民生部門（家庭）から排出される二酸化炭素は約35%増と人口の増加率以上に増えています。

平均気温の上昇

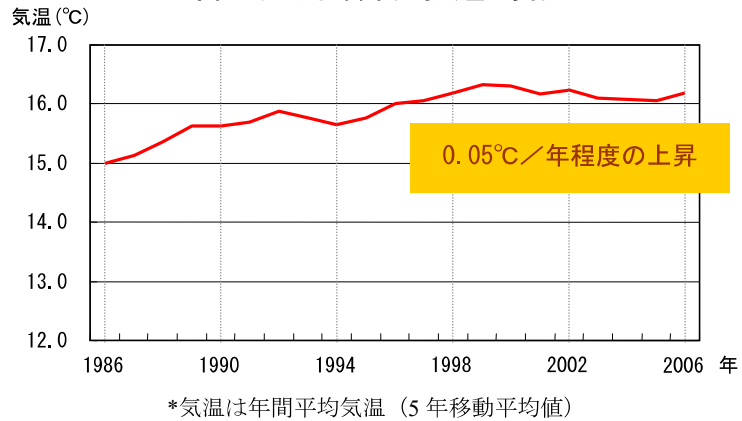
全世界における傾向と同様に、日本の気温も上昇しています。川崎市においても、平均気温は1986年からの20年間で約0.05度/年上昇し、夏季(7月~9月)の日最高気温は、年平均気温よりもさらに上昇が顕著で、約0.07℃/年程度上昇しています。

川崎市平均気温分布図(2007年8月)

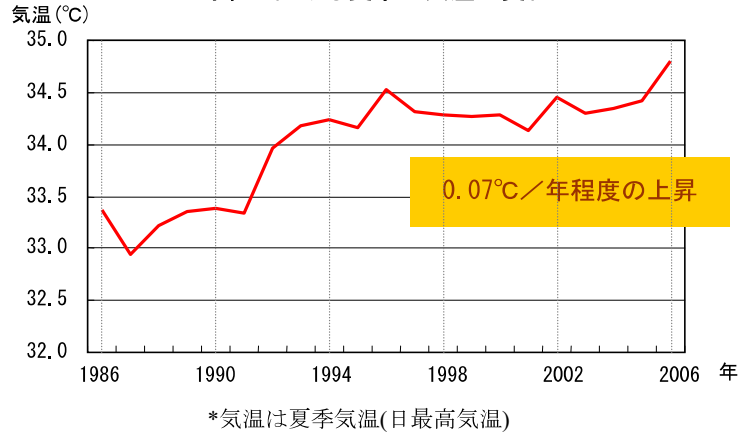


出典：夏季における市内気温観測結果(ヒートアイランド実態調査)
(川崎市公害研究所)

川崎市における年間平均気温の変化

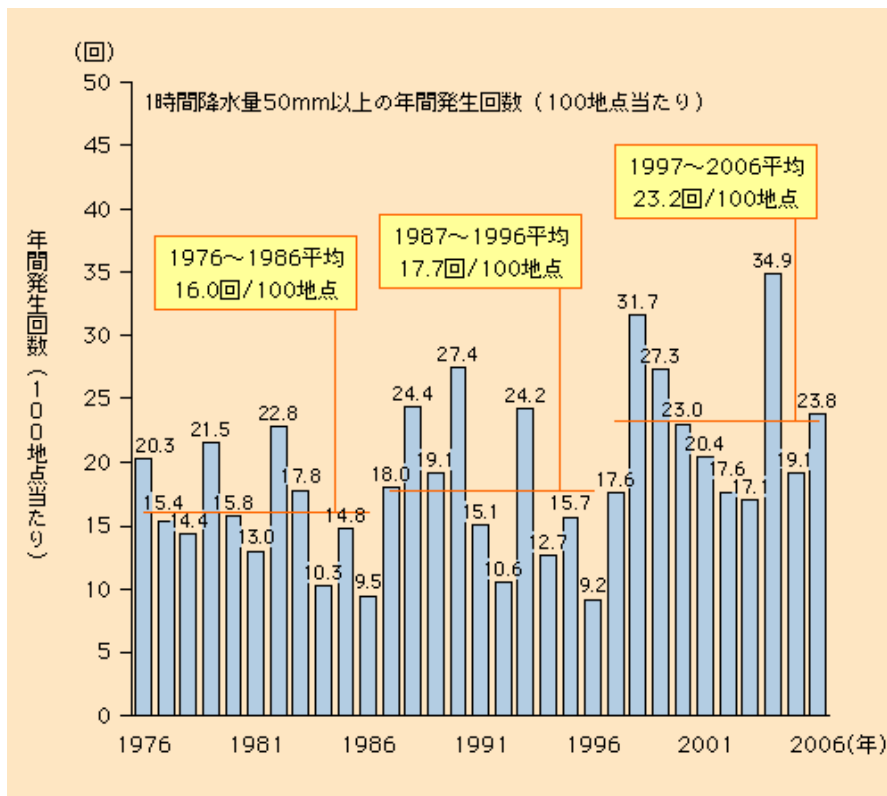


川崎市における夏季の気温の変化



増加する集中豪雨

また、近年、降雨の様相が変化し、短時間に局所的に発生する集中豪雨が増加しています。過去30年間の状況では、1時間に50mmを超えるような雨の回数が2004年には、観測史上最多となっています。大雨の発生数が長期的に増加する傾向にあるのは、近年進行しつつある地球温暖化の影響の可能性があります。



出典：国土交通省気象庁「気候変動監視レポート2006」

環境に対する意識の高まり・市民活動の展開

地球温暖化に対する人々の意識は、メディアや映画、自治体やNPO等の取組の影響により、高まりを見せています。また、環境に対する取組は、個人から企業まで、様々な領域で行われています。

川崎市においては、120ほどの市民グループ等が、環境に関する活動を行っています。高津区においても、市民健康の森や二ヶ領用水における取組をはじめ、落ち葉・生ごみリサイクルなど、様々な活動が行われています。

3 「エコシティたかつ」基本理念と基本目標

(1) 「エコシティたかつ」の基本理念

地球環境危機の時代に対応した、自然の賑わいとともにある持続可能な循環型都市構造の再生と創造 ～100年後のたかつのまちのために～

私たちがすむ地球は、異常気象や局地的豪雨、洪水、土砂災害、絶滅種の増加や食糧生産、健康への影響を及ぼすなど、大変な環境危機にさらされています。

地球環境危機における現状と課題に対しては、地域から環境課題の解決に向けて緩和策と適応策の両輪による取組を進めていくことが大切です。

私たちは、地域社会の一員として、高津区の特性を活かし、市民協働で地球環境危機の時代に対応し、100年後のたかつのまちのために、「生活の質」を問い直し、高めながら、自然の賑わいとともにある持続可能な循環型都市「エコシティたかつ」の再生と創造を目指します。

私たちがすむ地球は、異常気象や局地的豪雨、洪水、絶滅種の増加など、大変な環境危機にさらされています。20世紀半ば以降に観測された世界平均気温の上昇は、人為的なものである可能性が非常に高いと言われています。

温暖化の原因となる二酸化炭素の濃度は、工業化が進む前の1750年にはおよそ280ppmでしたが、2005年にはおよそ380ppmと増加しています。21世紀末までには540～970ppmになると予想されています。二酸化炭素の排出量を自然吸収量と同等まで減らして、濃度を安定させることが緊急の課題となっています。

地球温暖化の進行は洪水・土砂災害・渇水などの水災害とともに、生態系、食料生産、健康へも影響を及ぼしています。日本における絶滅危惧種の割合は、種の2割近くにも及んでおり、また、生物多様性の減少が課題となっています。

世界の平均気温は、今世紀末にはさらに2℃上昇することが避けられないとも予測され、被害の大規模化が指摘されています。地球温暖化対策は、緩和策（温室効果ガス排出の削減や吸収策）と適応策（気候変動がもたらす水災害や生物多様性の減少等、悪影響への対応策）の両輪によって進めていかなくてはなりません。

高津区は、南に広がる下末吉台地地域と北側の多摩川方向に開けた平坦地、並びにそれらの境界に伸びる多摩川崖線のベルトで構成され、農地や、崖線にそった緑が多く残っており、多摩川や平瀬川、矢上川、二ヶ領用水などの水系にも恵まれています。このような

地形・水系・緑の配置をふまえ、温室効果ガス排出の削減吸収策とともに、水災害への対応ならびに生物多様性の保全につとめてゆく必要があります。

そのような中、市民健康の森や二ヶ領用水における取組をはじめとする緑や水の保全を目指す活動や、廃食油や落葉・生ごみリサイクルなど、様々な市民活動が行われており、市民や企業など環境に対する意識も高まりを見せています。行政のみでは解決できない課題について、市民、企業、学校、行政等の協働によるさらなる対応が期待されています。

このような地球環境における現状と課題に対して、地域から環境課題の解決に向けた取組を進めていくことが大切です。高津区で生活し、学び、働き、活動する私たちは、100年後のたかつのまちのために、いま、私たちにできることを、行動に結びつけていくことが必要です。私たちは、地域社会の一員として、高津区の特性を活かし、地球環境危機の時代に対応した、自然の賑わいとともにある持続可能な循環型都市「エコシティたかつ」の再生と創造をめざします。この取組により、「生活の質」を問い直し、高めながら、より豊かな社会への転換を図ります。

コラム

「自然の賑わい」とは…

生物多様性条約“Convention on Biological Diversity”では、“biological diversity”は、生物の種の多様性、遺伝の多様性、生態系の多様性と定義されています。この生態系の定義の仕方は、一部では、複雑な相互関係で結びついた生物の高次の組織などとして定義されています。

しかし、伝統的に生態系とは、流域や丘陵など地べたを含むものというほかありません。

めずらしい生きものだけを守るのではなく、まちにある池や湿地、森などの多様な生態系を守れば同時にたくさんの生きものを守ることができます。そのため、生きものに注目する時は“生きものの賑わい”、両方を総合的に言う時には“自然の賑わい”という言葉を使うようにしています。

(2) 「エコシティたかつ」実現のための基本目標

- I 低炭素・省資源社会の実現
- II 自然共生型都市再生の推進
- III 地域に即した防災まちづくりの推進

I 低炭素・省資源社会の実現

- 市民一人ひとりが、身近なアクションをおこすことにより、地域（地球）の二酸化炭素の削減につなげ、資源を有効に活用します
- アクションを通じて環境を大切にする心（エコ・マインド）を育み、ライフスタイルの変革を促すことで、「生活の質」を再考し、その向上と、豊かな市民生活の実現、新たな文化・価値創造をめざします
- 京都議定書目標達成計画、川崎市地球温暖化対策地域推進計画、カーボン・チャレンジ川崎エコ戦略（CCかわさき）など、国や川崎市の計画と連動し、地域から実践します

II 自然共生型都市再生の推進

- 水系や流域、丘陵、崖線、谷戸などのランドスケープを重視した緑の保全と創造に取り組みます
- 農的空間（市街化区域内の生産緑地、市街化調整区域内の農地）を活かした緑豊かなまちづくりを進めます
- 学校ビオトープの整備を先導的なアクションとしつつ、国の第三次生物多様性国家戦略の趣旨や、川崎市の環境基本計画、緑の基本計画等を踏まえ、生命（いのち）の賑わい豊かな自然共生型の都市再生を、地域から推進します
- 人工物と自然の共生の視点から、その関係性を問い直し、「生活の質」へとつながる取組、景観づくりを進めます

III 地域に即した防災まちづくりの推進

- 局地的豪雨や台風の巨大化等による洪水や、渇水の深刻化など、気候変動によって増大すると予想される災害に適応しうる流域視野の地域の地形や水循環の特性に即した「水災害適応型都市」づくりを推進します
- 家庭や学校における雨水貯留・雨水利用・緑の保全による地下水の涵養等、流域を意識した治水の実践を足元から積み上げます
- 渇水リスクに対応して総合的水資源マネジメントを推進します

4 「エコシティたかつ」の実現に向けた行動計画

(1) 基本的な考え方

「エコシティたかつ」推進方針では、前述の3つの基本目標に基づく行動計画を「プロジェクト」として位置づけて、多様な主体の協働により展開していきます。

行動計画に取り組む際の視点として、次の5点を整理しました。

- ① 環境的・社会的・経済的持続可能性の実現
- ② 地域の流域特性に根ざした事業推進
- ③ 市民・企業・学校・行政の協働による推進と担い手の育成
- ④ 区の全事務事業の環境視点からの見直しと総合的展開
- ⑤ 資源の有効活用とリーディングプロジェクトによる効果的事業推進

① 環境的・社会的・経済的持続可能性の実現

環境的持続可能性を実現するためには、同時に、社会的・経済的な視点からの取組も必要です。「エコシティたかつ」の推進において、環境的視点を重視しながらも、社会的視点（顔の見える地域のつながりを大切にするなど）の社会関係資本の整備、セーフティネットの再構築、社会的公平性の確保など）や、経済的視点（再生可能エネルギーの普及により環境技術を産業として広めるなど、新たなビジネスモデルの構築など）を取り入れたプロジェクトを推進することにより、持続可能な都市をめざします。

② 地域の流域特性に根ざした事業推進

高津区には、下末吉台地面、その崖線、台地に刻まれた谷戸群、そして多摩川方向に開かれた低平地の4つの特徴的な地形があり、これらが大小の流域に区分されます。高津の基本的な地形に配慮し、それぞれの流域に根ざした緑地保全や健全な水循環系システムを構築することは、地球温暖化に伴う自然災害への適応策として、市民が安全に暮らしていくことのできる水災害に強い都市の基盤づくりとなります。

また、流域特性に応じたランドスケープデザインの視点から、良好な景観づくりに取り組めます。

③ 市民・企業・学校・行政の協働による推進と担い手の育成

高津区には、市民健康の森や二ヶ領用水における取組をはじめ、廃食油や落葉・生ごみリサイクルなど、様々な市民活動が行われています。また、企業でもISOの取組等が行われ、学校では環境学習に取り組んでいます。市民、企業、学校、行政等の多様な主体が、

共通の目標に向かって、それぞれの役割と責任の中でできることを進め、連携することで大きな推進力となり、相乗的な事業展開が期待できます。さらに、テーマによっては区内だけではなく、他の地域と連携することが必要です。

また、地域での協働の担い手となる人材育成と活動支援、環境教育・学習についても、取組を進めていくことが重要です。

④ 区の全事務事業の環境視点からの見直しと総合的展開

協働推進事業をはじめとする高津区の全事務事業を環境的視点から見直し、「エコシティたかつ」の推進を分野別施策の融合パレットと捉え、行政エリアにおける地域諸施策の総合の場として推進します。また、100年後の高津のありようを見据え、長期的な視点に立った制度設計・開発を進めます。

⑤ 資源の有効活用とリーディングプロジェクトによる効果的事業推進

限られた財源や資源をリーディングプロジェクトに集中することで、より相乗的、効果的に事業を推進します。また、区内の環境資源を的確に把握し、適切な資源マネジメントを行います。

コラム

「健全な水循環系システム」とは…

降った雨が地中にしみこみ、それが川や地下水となって、海へ流れ、水蒸気となって雲となり雨になる、という水の循環があります。その水の循環のあり方が人々の暮らしを脅かさず、健全で豊かな産業や自然を支え、またそれぞれにバランス良く、良い効果を与えることを水循環の健全化を図るといいます。治水も含み、ハード、ソフト、両方のシステムを表します。

(2) 12のプロジェクト

基本目標に基づく行動計画のうち、2009（平成21）年度から2010（平成22）年度の2か年の短期的な取組を「12のプロジェクト」として位置づけて多様な主体の協働により展開していきます。そのうち、各行動計画を先導的に展開していく「リーディングプロジェクト」を設定し、優先的かつ重点的、戦略的に展開していくことによって、その成果が広く行動計画全体へ波及し、各基本目標のより効果的、効率的な早期達成を目指します。

■ プロジェクトの概要

<基本目標>

- I 低炭素・省資源社会の実現
- II 自然共生型都市再生の推進
- III 地域に即した防災まちづくりの推進

★リーディングプロジェクト

	I	II	III
●地図による地域環境資源の共有化の促進 ★ 水系や流域等のランドスケープを重視した緑の保全と創造に取り組むため、地域資源を入れたベースマップを作成します	○	○	○
●学校流域プロジェクト ★ 学校を、健全な水循環と生き物の賑わいを再生し支える地域のモデル基地と位置づけ、ビオトープや雨水利用施設等を計画的に整備し、学習活動、地域との交流活動等に活用します	○	◎	◎
●区役所の緑化等、環境技術導入によるエコシティホール化の推進 ★ 庁舎を環境展示場「エコシティホール」とし、来庁者への環境教育の場とするとともに、モデル事業者として実践を示します	◎		
●緑のカーテン事業の展開 ★ 「緑のカーテン」のさらなる普及啓発、拡大のため、ゴーヤーの育て方に関する講習会、コンテスト等を実施します	◎	○	
●エコ・エナライフコンクールなど普及啓発イベントの実施 ★ 高津区区民会議や「エコシティたかつ」推進会議の構成団体等との協働で、区民向けの啓発イベント等を実施します	◎		
●橘地区の農的資源を活かしたまちづくりの推進 ★ 橘地区にある緑地等の環境資源、市街化調整区域内農地を中心とした営農活動等の地域資源を活かし、地域間交流の活性化、情報発信等に取り組みます	○	◎	○

	I	II	III
<p>●「緑と水でつなぐ 歴史街道 花街道」(緑化推進重点地区計画)の推進 2008年3月に策定された「溝口駅周辺地区緑化推進重点地区計画」に基づき、溝口駅周辺市街地の都市緑化や良好な緑の景観づくりを進めます</p>	○	◎	○
<p>●雨水利用の促進 「まちの小さなダム」としての雨水利用促進のための啓発活動等に取り組みます</p>	○	○	◎
<p>●再生可能エネルギーの利用促進 都市における自立的なエネルギー確保の観点から、太陽エネルギー等、再生可能エネルギーの利用促進に向けて、普及啓発活動等に取り組みます</p>	◎	○	
<p>●「まちなか油田プロジェクト」の推進に向けた調査・研究 家庭から出される使用済みてんぷら油の市民等による回収方法等についての調査・研究を進め、石けんなどにリサイクルすることによって、地域内の市民による資源循環を進めるとともに、環境意識の啓発を図ります</p>	◎		
<p>●エコ企業調査プロジェクト 環境に配慮した取組を積極的に行っている高津区の企業・事業所、商店街を紹介するなど、企業の環境への取組のインセンティブとし、企業とのネットワークづくりに向けた取組を市民協働で進めます</p>	○	○	○
<p>●「エコシティたかつ」推進のための体制づくり 「エコシティたかつ」の実現に向けて、様々な主体が参加でき、また主体間の連携やプロジェクト間の調整、市域全体との連携・調整や多様な媒体を活用した効果的な情報発信等を行う推進体制づくりを行います</p>	○	○	○

- ◎ 当該基本目標と関係が深い
○ 当該基本目標と関係がある

※12のプロジェクトの詳細は、資料編をご覧ください。

■ プロジェクトの推進体制

プロジェクトを推進するためには、行政の財源や人材だけではなく、「エコシティたかつ」の理念と共通する、それぞれの主体が行っている活動や今後展開していく活動と連携しながら実施していくことが求められます。プロジェクトには、行政が主体となって行うものばかりではなく、市民グループや学校、企業が主体となって推進するプロジェクトも掲げています。それぞれの主体が役割を担い、連携し、相互支援していくことで、プロジェクトを推進します。

	区民	市民グループ／町内会	事業所／商店街	学校	行政
★地図による地域環境資源の共有化の促進	参加	協働実施	協力	協力	協働実施
★学校流域プロジェクト	参加	協働実施	協力	協働実施	協働実施
★区役所の緑化等、エコシティホール化の推進	参加	協力	協力	参加	事業実施
★緑のカーテン事業の展開	協働実施	協働実施	協働実施	協働実施	協働実施
★エコ・エネライフコンクールなど普及啓発イベントの実施	参加	協働実施	協力	協力	協働実施
★橘地区の農的資源を活かしたまちづくりの推進	参加	協働実施	協働実施	協働実施	協働実施
●「緑と水でつなぐ 歴史街道 花街道」の推進	参加 協働実施	協働実施	協働実施	協働実施	協働実施
●雨水利用の促進	参加	企画提案 協働実施	協力 参加	協力	協働実施
●再生可能エネルギーの利用促進	参加	企画提案 協働実施	企画提案 協働実施	参加 協働実施	協力
●「まちなか油田プロジェクト」の推進に向けた調査・研究	参加	調査・研究	参加	参加	協力
●エコ企業調査プロジェクト	参加	協働実施	協働実施	参加	協働実施
●「エコシティたかつ」推進のための体制づくり	協働実施	協働実施	協働実施	協働実施	協働実施

企画提案:事業実施前の企画立案

参加:積極的、主体的に事業に関わること

協働実施:他者と役割分担した上で主体的に事業を実施する

事業実施:事業主体として事業の全プロセスに関わる

協力:企業等の所有物の無償提供など

調査・研究:事業実施前の調査・研究等

5 推進体制と計画の見直しの仕組み

(1) 「エコシティたかつ」推進会議の役割

「エコシティたかつ」推進方針を策定し、それを推進するため、2008（平成20）年6月に「エコシティたかつ」推進会議が設置されました。会議の構成委員として、高津区民、市民グループ、事業者、区内学校関係者に加え、学識経験者、川崎市職員が参加し、事務局は高津区役所が担う体制となっています。

■ 第1期「エコシティたかつ」推進会議の役割（2008年度～2009年度）

2008（平成20）年度の「エコシティたかつ」推進会議では、「エコシティたかつ」推進の指針となる本方針を策定しました。2009（平成21）年度は、本方針の推進役としての役割を担い、高津区区民会議とも連携しながら進めます。また、「川崎再生 ACTION システム(事務事業総点検・施策評価)」等を活用しながら、行動計画に掲げたプロジェクトの進行状況を確認し、取組の成果を検証するとともに、2010年度に向けた行動計画の見直しを行います。

■ 「エコシティたかつ」推進会議の将来構想について

「エコシティたかつ」推進会議は高津区役所が設置し、市民、事業者、専門家などが参加する仕組みとなっていますが、将来的には、推進会議を市民と区役所の協働運営として、「エコシティたかつ」の実現に向けて、様々な主体による対話と協働、調整の場としての役割を担うことが期待されます。

(2) プロジェクトの推進体制

行動計画に掲げた個々のプロジェクトは、市民グループ、町内会や学校、事業所、行政などの多様な主体がそれぞれに役割を担い、推進主体となります。また、多くの市民（区民）に理念とプロジェクトのねらいを共有してもらい、プロジェクトへの参加を呼びかけ、推進基盤を強化します。

(3) 計画の検証・見直しの仕組み

「エコシティたかつ」推進方針は、今後10年にわたる環境まちづくりの取組の方針を示すものですが、ここに盛り込まれた行動計画は、毎年その進行状況と成果をふりかえり、内容の見直しを行っていくものです。行動計画の検証・見直しにあたっては、「エコシティたかつ」推進会議が主体となり、検証と見直しのプロセスはホームページ等で広く区民に公開していきます。

(4) 中長期的なプロジェクトの案

行動計画のうち、より中長期的な視点に立って展開していくものを「中長期的なプロジェクトの案」とし、そのうち概ね3年から5年後の事業展開を目指すもの「中期的なプロジェクトの案」、5年後から10年後までに事業展開を目指すものを「長期的なプロジェクトの案」と位置づけます。

これらは、第3期以降の実行計画策定作業の中で、その時点での情勢を基に検討を行い、確定するものとします。

プロジェクトは、市民グループ、町内会や学校、事業所、行政などの多様な主体がそれぞれに役割を担い、推進主体となります。

■ 中期的なプロジェクトの案

● 小さな循環・生ごみリサイクルシステムの構築

「生ごみリサイクルプラン」に基づき、ごみの減量化、家庭から出される生ごみの堆肥化などに、地域からの取組を検討します。

● 行政区レベルでの環境マネジメントの実践的な取組

「環境管理システム（エコオフィス計画）」等と連携しつつ、区における全事務事業の環境視点からの見直しと評価システムの構築等に取り組みます。

● 円筒分水、かすみ堤を活かした「緑の回廊」づくりの推進

円筒分水や貴重な地域遺産であるかすみ堤の活用等を進めるとともに、津田山駅周辺の緑地から多摩川へ通じる緑の回廊（コリドー）づくりに取り組みます。

● 複合型氾濫マップ（ハザードマップ）の協働作成

単一流域を想定した堤防破堤や越流を想定した洪水氾濫マップや、内水の浸水実績図などをもとにした複合型氾濫マップの作成を検討します。

● 多摩川崖線の緑の保全・回復・育成を目指した市民協働の取組

高津区の景観を特徴づける多摩川崖線は、次世代に継承すべき大切な環境資源です。地域資源ベースマップ等を参考に、保全緑地をとりまく環境や植生状況等を確認し、様々な主体が連携・参画できる保全管理の仕組みづくりや、緑地保全制度の拡大を図るためのPR手法について、市民協働で検討します。

● 仮称「たかつ地域水循環計画」の検討

地域における健全な水循環の再生を目指し、河川における水質と水量の一体的管理、生活排水対策の推進、地下水保全、湧水保全等に、地域から計画の策定に向け、市民協働で検討します。

●仮称「たかつ自然の賑わいづくり計画」の検討

国の生物多様性国家戦略等の趣旨を踏まえ、区レベルにおける先行的な取組として、仮称「たかつ自然の賑わいづくり計画」の策定に向け、市民協働で検討します。

●水の道調査に基づく復元水系図の作成

水文化の再評価と環境再生の視点から、二ヶ領用水をはじめとする区内の用水路、小河川の復元水系図を、市民協働で取り組みます。

■ 長期的なプロジェクトの案

●自然環境・地域環境に配慮した新たなエコ・コミュニティの検討

流域思考による持続可能な地域づくりの視点から、環境・社会・経済のバランスの取れたコミュニティベースの新たな自治のあり方について検討します。

●生命地域の視点によるまちづくりの検討

環境政策と都市政策を連動させたまちづくりを、地域で統合的に推進していくための大地や水循環の体系に則したシステム構築に向けて、検討します。

●小流域単位の総合治水の推進

複合型氾濫マップ、仮称「たかつ地域水循環計画」、仮称「たかつ自然の賑わいづくり計画」等に基づき、小流域単位での重層的治水対策の推進に向けて、検討します。

コラム

「生命地域」とは…

人工的な境界でなく、流域や丘陵などのように、生態的な目印で空間・大地を区画するときに使用される用語です。特に流域は生物多様性保全の枠組として国際的にも注目されている基本的な生命地域の例です。一般論でいえば地球は最大の生命地域とってよいですが、その場合は従来から「生命圏」(biosphere) という表現が使用されています。比較的小さな空間を示す場合はビオトープ (biotope) という表現も用いられています。この用語は、わが国では小さな池などを指すのに限定して使用されることもありますが、本来はもっと複合的に、かつ大きな規模の空間にも広く使用されています。

6 これからの検討課題

「エコシティたかつ」推進方針の中では、より具体的な取組を目指すものを行動計画と位置づけ、基本理念の実現と基本目標の効果的な達成のために、さらに詳細な検討と調整を要する課題を、現時点では「これからの検討課題」として位置づけています。

「これからの検討課題」については、より広範な議論と検討を要請し、これからの循環型都市構造の再生と創造に向けた多様な主体による取組への問題提起とします。

●自然共生型都市再生の推進に向けた区としての総合行政の展開

これからの持続可能な循環型都市構造の再生と創造のための超長期的なまちづくりを進めていく視座から、現在の都市計画行政、建築行政などの都市政策と、地域水循環の再構築、生物多様性の再生などの環境政策、ひいては新たなコミュニティ・デザインと社会統合を射程におく社会政策とを連動させ、地域レベルで統合的に推進していくことが求められています。

●都市の農的空間を活かしたまちづくりの推進

高津区内の農地は、元来の農業生産のための空間としてだけでなく、都市部に残されたアメニティのための緑地空間、防災のためのオープンスペース、子どもたちの教育活動のための空間など、多面的な機能が期待できる貴重な空間です。相続発生による相続税の支払いのため、生産緑地指定の解除を行い、民間事業者へ売却する場合などでは、公共施設負担を伴わないミニ開発等を行うことにより、宅地化が進み、住環境や営農活動にも支障が生じています。

これからの農的空間の保全・活用と周辺の住環境の共生をはかるためにも、例えば農住組合制度、定期借地権、コーポラティブ住宅、協調的敷地計画手法などの連携的活用を図り、あわせて良好な農的空間を活かすための仕組みづくり、新たな制度設計などに関する検討も必要です。

●環境負荷の小さい地域交通政策の検討

個人の移動手段や物流機能の観点から、自動車の利便性や効率性は評価されるべきものではありませんが、一方で、地球温暖化に与える影響など、その環境負荷は見逃すことができない過大なものでもあります。「脱自動車社会」を視野に入れつつ、公共交通機関の利用促進、自動車交通流の円滑化、低公害車の導入等の新たな地域交通システムの導入など、持続可能な交通（E S T）の実現に向けての検討が重要です。

●環境活動・環境資源の保全に関する新たな資金支援制度の創出

地域での市民による環境活動がより多彩に展開されつつある中で、そうした活動を支える仕組みや、従来の公的制度ではカバーすることのできない緑地などの環境資源の保全のために、税財源にとらわれない多様な資金循環や資金調達に向けた新たな制度開発が求められています。

●中長期的な視点からのまちのあり方に関する検討

持続可能な環境負荷の低いまち「エコシティ」を目指すとともに、将来本格化する人口減少時代に相応しい都市機能を維持していくために、これからの都市のあり方について、産業政策や社会保障制度のあり方も含め、より複眼的視点からの検討が重要です。

資料編

資料1 「12のプロジェクト」に関する考え方

●地図による地域環境資源の共有化の促進

★リーディング
プロジェクト

■ねらい

「エコシティたかつ」の推進のためには、地域の現状をより正確にかつ具体的に把握し、それに対応した適切なアプローチを選択することが重要です。そして、これまでのように人為的な行政区画や図面上の空間把握を計画枠組とするのではなく、まちの小さな丘や平地の広がり、水系や小流域、緑の豊かさと生きものたちの賑わいなどを重視し、地域を小流域ごとに、自然ランドスケープの入れ子的な空間配置として把握し、その制約と可能性に着目した計画策定が求められています。これからの水系や流域等のランドスケープを重視した緑の保全と創造による自然共生型の都市再生、そして地域の地形や水循環の特性に即した「水災害適応型都市」づくりの推進に取り組むため、地域の地形的な特性や環境資源を的確に把握し、今後の施策展開のあり方を検討する際の基礎的データのひとつとして活用するために、多様な地域情報を入れたベースマップを作成します。

また、表現形式を工夫し、誰もが理解しやすい地図とすることで、「エコシティたかつ」の推進に関わる多様な市民や団体、企業、行政等が、意見交換を有効に進め、共通の認識を持つためのツールとしても活用していきます。

■具体的な内容

- ・土地の高さデータを読み込み、それに基づいて区内の小流域を明示したものをベースとし、その中に環境関連の各種地域資源を取り入れ、今後の施策展開の基本的なベースマップとします。
- ・高津区内で完結する小流域は限られており、必要に応じて、近隣地域を含めた形でのマップとします。
- ・多様な情報を分かりやすい形式で表示するために、その一覧性に配慮しつつも、表現方法の詳細については、今後検討していくこととします。



■推進体制など

- ・「エコシティたかつ」推進事業の委託事業として、原案づくりを進め、「エコシティたかつ」推進会議の場等での調整を行いながら作成を進めます。
- ・高津区まちづくり協議会の「歩こう、知ろう！高津の水と緑・プロジェクト」をはじめ、市民グループ等との連携を進め、地域の詳細な等身大の情報掲載を目指します。
- ・完成したデータは、「エコシティたかつ」推進事業の各種プロジェクトや高津区内で展開予定の他の事業などでも活用する予定です。

■ ねらい

学校は、子どもの学習の場であるとともに、子どもの学習活動や創造的な遊びにさまざまに接することを通して保護者、教員、地域市民が交流し、学校と地域文化が相互に影響を与えあう場でもあります。また、緊急時には、地域の防災の拠点として活用されます。

このような相互の交流の深まりにも期待しつつ、学校を、将来を担う子どもたちが、身近な場所で自然や水循環の仕組み、さらには自然再生の過程を実感する場として位置づける。また同時に、健全な水循環のもとに生きものの賑わいを再生し支える地域のモデル基地としても位置づける。そして、各種のビオトープや雨水利用施設などを計画的に整備し、学習活動、課外活動、地域との交流活動等に活用します。

適切な年度計画のもと、小学校で取組を開始し、高津区全ての学校への展開を目指します。また、プロジェクトを進める上で、地域の町内会や、市民グループ、NPO、行政等の連携等は欠かせません。財源の確保や人材の育成なども同時進行または検討します。

■ 具体的な内容

- ・ビオトープの創出とモニタリング、管理、活用

学校がある土地や自然、既存の施設などを活かし、ビオトープを創出します。

水のビオトープ … 雨水利用を工夫した池等

草地のビオトープ … 蝶やバッタが暮らせる在来植物の草地

森のビオトープ … 蝶や鳥が採餌や巣作りの頼りにできる落葉樹主体の木立
落葉樹の落葉落枝は堆肥や保水土壤づくり等に活用

- ・学校の敷地内に降った雨水の保水の推進

雨を貯留する施設を工夫し、校庭の保水を進めます。

- ・貯留雨水の活用

貯留した雨水を、ビオトープや花壇への水まきに利用します。

- ・学習教材としての活用

ビオトープや雨水の利用などを通して、生物や健全な水の循環、学校を含む足元の小流域、それを含むさらに大きな流域・水系について学び、学年をこえた学習教材として活用します。



■ 推進体制など

区内の学校を地域の拠点として、学校、地域の町内会や市民グループ、NPO、行政が連携して進めていくこととします。2008年度に先行的に再生整備した久地小学校、西梶ヶ谷小学校のケースを参考としながら、その地域の状況に応じた柔軟な推進体制を構築していきます。

■ ねらい

環境技術の分野における進展には日々目覚ましいものがあり、大量な情報が流通していますが、その実際に触れ、考える機会はあまり多いとはいえないのが現状です。そこで、毎日多くの来庁者がある区役所庁舎において、屋上緑化、壁面緑化や再生可能エネルギーの導入、ビオトープ整備など、各種の環境技術の実践を示す環境展示場「エコシティホール」として整備します。そして、来庁者への環境教育の場とするとともに、関連データの収集や情報発信を行いつつ、モデル事業者としての区役所の実践を示します。

■ 具体的な内容

- ・コケによる屋上緑化（4階屋上・施工済み）

乾燥などの厳しい環境にも強いスナゴケやハイゴケを活用した屋上緑化です。土壌を必要としないため、超軽量で緑化が可能で、灌水、施肥、刈り込みの必要がなく、維持管理が容易であることから、屋上緑化、壁面緑化として注目されています。古いコケの上に新たなコケが再生されるので、半永久的に生長します。

- ・ウイスキー樽のリサイクルプランターと緑化に適した植物“セダム”（4階屋上・施工済み）

リサイクルによるプランターに植えてあるのは“セダム”という多肉植物です。セダムは日当たりのよい乾燥した場所を好みますが、日陰などでも耐えて生育します。その丈夫さから屋上緑化の定番として知られています。種類も600以上と豊富で、展示してあるセダムは、メキシコマンネン草、キリンソウなどです。

- ・ミニ・ビオトープ（4階屋上、庁舎西側・施工済み）

4階屋上にはウイスキー樽をリサイクルしたものに、ビオトープを連想する水草系植物を置いています。このような小さなビオトープでも、個人で簡単に始められる小さな自然保護です。また、水循環用のソーラーパネルをあわせて整備しています。庁舎西側にもミニ・ビオトープを整備しました。

- ・ペットボトルのリサイクルで作ったベンチ（1階エントランス前・施工済み）

区役所から出たペットボトルのふたをリサイクルしたベンチを区役所1F入口前に設置しました。

- ・在来種を活用した壁面緑化（区役所東側壁面・施工済み）

「溝口駅周辺地区緑化推進重点地区計画」に基づき、川崎市緑化基金を活用した事業として、区役所東側壁面に日本の在来種による壁面緑化のユニットを取り付けました。植物が生長し、緑化が完成するまでには約10年を要します。

■ 推進体制など

2009年度は、環境局と連携し、屋上に太陽光発電パネルを設置する予定です。

■ ねらい

2008年度に実施した「緑のカーテン」のさらなる普及啓発、拡大のため、ゴーヤーの育て方に関する講習会、コンテスト等を実施します。たかつのまちに「緑のカーテン」が広がることによって、一つひとつの小さなカーテンがまちの中の緑としてつながり、その相乗効果をもたらし、低炭素社会の実現だけでなく、自然共生型都市再生へのワンステップともなります。



■ 具体的な内容

2009年度の予定としては、4月に、高津区役所と橘出張所で「緑のカーテン」講習会を1回ずつ実施します。講習会ではゴーヤーの種、作り方パンフレットを無料配布する予定です。8月には、「緑のカーテン」コンテスト（2008年度応募数:55件）を実施します。自宅等で栽培した緑のカーテンの写真をもとに審査を行い、10月予定の「緑のカーテン表彰式」で入賞者の発表と表彰式を行います。コンテスト応募者には、菜の花の種を配布する予定です。12月には、花と緑のパネル展（仮称）を開催し、次年度に向けての啓発を図ります。

※緑のカーテンとは、植物を建物の壁などの側面で育て、日の光を遮断することで室内の温度上昇を抑える自然のカーテンです。夏の日差しを遮断することで、室内のエアコンの使用を減らすだけでなく、緑のカーテン自体も光合成により、CO₂削減に寄与する地球にやさしいカーテンです。緑のカーテンに使用される植物は、ゴーヤーをはじめ、あさがお、へちまなどのつる性の植物です。



2008年度「緑のカーテン」コンテスト団体部門最優秀賞の西椀ヶ谷小学校の様子

■ 推進体制など

2008年度は高津区役所が事務局の中心となっていますが、2009年度以降については、「エコシティたかつ」推進会議をはじめ、市民グループ等を中心として運営できるよう検討を進めます。



■ ねらい

「エコシティたかつ」をより効果的に推進していくためには、循環型都市構造の再生と創造に向けた新たな制度構築などの仕組みづくりに合わせて、広く情報発信や情報共有、普及啓発の取組を同時並行的に進めていくことが重要です。地域でのエコマインド（環境を大切にする心）を育み、エココンシャス（環境志向の高い）なものにしていくことによって、これまでの消費行動の変革を誘導し、より質の高いライフスタイルの実現と新たな環境価値とエコロジカルな流域文化の創造に取り組んでいきます。

これまで、「環境まちづくり」を調査審議事項として、検討を進めてきた高津区区民会議や「エコシティたかつ」推進会議の構成団体等との協働で、区民向けの啓発イベント等を実施します。「エコ・エネライフコンクール」は、省エネルギー活動などの環境にやさしい実践活動のうち、他の模範となるようなユニークな取組を表彰し、環境に関する意識を高め、身近な地域からの「環境まちづくり」を進めることを目的とします。

■ 具体的な内容

7月から9月にかけて、「たかつエコ・エネライフコンクール」の応募を受け付ける予定です。表彰の対象となる活動は、「個人・ファミリー賞」、「グループ賞」、「事業者賞」になります。「グループ賞」は、身近な自然に対する保全活動、身近な自然の創造を行う先進的な活動、省資源、省エネルギーなど地球温暖化に配慮した活動、ゴミの減量化・リサイクルによる資源循環型社会の構築に資する活動、環境学習等の環境意識の高揚に資する活動などが対象となります。「事業者賞」は、環境や省エネルギーに配慮した事業経営、環境に関する社会貢献、区内事業者が開発・商品化している環境技術、その他環境に関して有効な活動が対象となります。表彰された取組は、高津区区民会議と「エコシティたかつ」推進会議、高津区役所の三者が積極的に公表するとともに、その活動等の普及に努めます。

■ 推進体制など

高津区区民会議、「エコシティたかつ」推進会議、高津区役所の三者が協働で推進します。



■ ねらい

高津区の橘地区久末には市街化調整区域内にまとまった農地があり、周囲の市街化区域内にも生産緑地などが点在しています。トマトやブロッコリーなど品質の高い野菜が作られ、90年以上もの間、農産物品評会などが行われています。

高津区では、農業生産者と消費者との交流や豊かな自然を活かし、食や農をテーマにした地域の活性化を目指した「たちばな農のあるまちづくり」を推進する予定です。

橘地区には、農地も豊富ですが、奈良時代の県庁である橘樹郡衙の跡地推定地やヤマトタケルノミコトにちなんだ伝説がある橘樹神社、子母口富士見台古墳などの歴史的な地域資源や、多摩・三浦丘陵群の斜面緑地や鶴見川水系の湧水などの環境的な地域資源も豊富に残っています。「たちばな農のあるまちづくり」では、流域思考によるまちづくりを進める「エコシティたかつ」推進方針のリーディングプロジェクトとしての位置づけからも展開事業を整理しつつ、豊かな地域資源を活用しながら、「農」をキーワードとしたまちづくりを推進し、地域間交流の活性化、情報発信等に取り組みます。

■ 具体的な内容

- ・食と農の地域資源を発見する活動の推進
- ・食と農の交流拠点機能の整備
- ・地場農産物の購入や食事が地元でできる仕組みづくり
 - 区役所レストランでの久末産野菜を使ったメニューの提供（2008年度モデル事業）
 - 「たちばなブランド」の創出・推進
 - 直売所の整備や情報発信
- ・地産地消と子どもの食育を結び、次代に伝える活動づくり
- ・市民パワーで地域資源を活性化、ネットワーク化

■ 推進体制など

久末生産組合、セレサ川崎農業協同組合、高津観光協会、元気な高津をつくる会、高津区食生活改善推進員協議会、高津区まちづくり協議会など、地域における多様な主体と連携しつつ、橘地区固有の付加価値を高め、高津地区との地域間交流の促進、地産地消の推進等に取り組み、地域活性化を目指します。



●「水と緑でつなぐ 歴史街道 花街道」(緑化推進重点地区計画事業)の推進

■ ねらい

溝口駅周辺地区は、大山街道、社寺、円筒分水から続く二ヶ領用水などの歴史的資源や市民活動により支えられている花街道、溝口駅北口のキラリデッキなど、駅を中心に、にぎわい、歴史と文化、市民活力など多彩な顔を発信しています。こうした地域資源を活かしながら、市民や事業者との連携により、花と緑でつなぐ「水と緑のネットワーク」を形成し、高津区の玄関口として誇れる緑豊かなまちづくりを進め、自然共生型都市再生に向けた一つの取組とします。

■ 具体的な内容

- ・市民や事業者と連携した緑化の推進と維持管理

溝口駅周辺や住宅地等の民有地の緑化を推進し、市民や事業者と連携した持続的な緑の育成を行います。また、地域緑化推進計画づくりの支援と認定を推進します。

- ・地球環境に配慮した緑の維持と創出
- ・二ヶ領用水沿いの緑と水の回廊づくり、身近な水辺空間の創出など



●雨水利用の促進

■ ねらい

雨は四季を通じて私達に恵をもたらしてくれますが、貯留して、庭木への散水やトイレ、防火用水への使用など、さまざま生活の場面で活用していくことが可能です。

足元に降った雨も貴重な水源であり、雨水を貯留し地域で小さな水源を確保することは、地球環境の面からも優れていて、遠方の水源に過度に依存した現在のライフスタイルから脱却した、潤いのある生活へのワンステップともなります。

また、雨水の利用を進めることは、地域内での水循環の再生にもつながります。溜めれば重要な資源という観点から、「まちの小さなダム」として、地域での雨水利用を促進していくために、啓発活動等に取り組みます。

■ 具体的な内容

- ・雨水利用に関する情報収集と調査研究
- ・雨と水文化に関する調査研究
- ・学校ビオトープ整備等における雨水利用の促進
- ・雨水利用や雨水タンク、雨水集水装置、雨水利用システム等に関する普及啓発など



●再生可能エネルギーの利用促進

■ ねらい

低炭素・省資源社会の実現に向け、区が率先して温室効果ガス排出の削減に向け取り組むとともに、都市における自立的なエネルギー確保の観点からも、太陽エネルギー等、再生可能エネルギーの利用促進に向けて、広く普及啓発活動等に取り組みます。



■ 具体的な内容

- ・再生可能エネルギー利用に関する普及啓発
- ・高津区役所におけるグリーン電力購入によるカーボン・オフセットの推進
- ・高津区総合庁舎における太陽光発電システムの導入（エコシティホール化の取組の一環として実施予定）など

●「まちなか油田プロジェクト」の推進に向けた調査・研究

■ ねらい

家庭で消費される食用油は、1人当たり1ヶ月に230cc、全国では20万リットルにもなり、それらは下水に流されるか、ごみとして燃やされています。その油を回収し、石けんやバイオディーゼル燃料として再利用することにより、地域内で資源を循環することができます。回収方法等についての調査・研究を進め、地域内の市民による資源循環を進めるとともに、環境意識の啓発を図ります。

■ 具体的な内容

- ・区内における回収ポイント、回収量の拡大に向けた調査・研究
- ・リサイクル石けんの利用拡大や再利用の仕組みづくりに向けた調査・研究 など



●エコ企業調査プロジェクト

■ ねらい

環境に配慮した取組を積極的に行っている高津区の企業・事業所、商店街を紹介するなど、企業の環境への取組のインセンティブとし、企業とのネットワークづくりに向けた取組を市民協働で進めます。



区内企業による緑のカーテンの取組

■ 具体的な内容

- ・市民レポーターによるエコ企業インタビュー

緑のカーテンなど、環境に配慮した取組を行っている企業・事業所、商店街などにインタビューし、ホームページなどで紹介します。

- ・様々な機会をとらえた区内環境技術の情報発信 など

「川崎温暖化対策推進会議（C C川崎エコ会議）」との連携や、「川崎発！ストップ温暖化展」、「川崎国際環境技術展」への参加等を通して、環境技術を扱っている企業の情報を収集、発信します。

- ・「かわさきコンパクト」と連携した市内・区内の企業・事業所とのネットワークづくり

「かわさきコンパクト」（環境局）と連携し、「かわさきコンパクト」に参加している市内・区内の企業や団体の取組事例やCSR活動などを紹介し、ネットワークづくりを行っていきます。

●「エコシティたかつ」推進プロジェクト

■ ねらい

「エコシティたかつ」推進方針は、自治体が担うべき役割を明記した狭義の行政計画の部分に加え、広く地域の多様な主体が担うべき役割などを指し示す社会計画的な要素を含んだ計画です。その実現には、地域における多様な主体間の連携と協働が不可欠であり、様々な主体が参加でき、また主体間の連携やプロジェクト間の調整、市域全体との連携・調整や多様な媒体を活用した効果的な情報発信などを行う推進体制づくりを行います。

■ 具体的な内容

- ・「エコシティたかつ」推進会議を軸としたプロジェクトの推進と進行管理
- ・多様な主体間のネットワーク形成促進に関わる仕組みづくり など



資料2 推進会議委員名簿

(敬称略・順不同)

氏名	所属など	備考
岸 由二	慶應義塾大学経済学部 教授	委員長
小島 聡	法政大学人間環境学部 教授	
田中 友章	明治大学理工学部 准教授	
水谷 衣里	三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 研究員	
住田 三枝子	川崎・ごみを考える市民連絡会	
吉田 威一郎	ニヶ領用水ウォッチング・フォーラム 代表	
日下 裕子	子育て支えあいネットワーク満	
横山 登	高津区市民健康の森を育てる会 企画部担当	
伊中 悦子	高津区まちづくり協議会 副会長	
川辺 奈津女	区民ミニ・ガーデン 運営委員長	
長村 吉洋	公募	
若杉 和身	公募	
三島 直人	公募	
井坂 洋士	公募	
横山 滋	区長推薦	副委員長
桑畑 祥生	川崎市立小学校長会高津支部(西梶ヶ谷小学校 校長)	
秋元 和彦	株式会社ミットヨ 総務部 主査	
鈴木 和彦	川崎市新エネルギー振興協会 会長	
井澤 正勝	川崎市高津区役所 副区長	
高松 順子	川崎市環境局地球環境推進室(地球温暖化対策担当) 主幹	
堤 健一郎	川崎市まちづくり局総務部企画課 課長	

<事務局>

川崎市高津区役所地域振興課 課長 五十嵐 泰次、主査 新井 正男、主任 星 和明

川崎市高津区役所企画課 課長 中村 茂、課長補佐 新井 勇、加藤 行一郎

<コンサルタント>

特定非営利活動法人まちづくり情報センターかながわ 事務局長 藤枝 香織、梶谷 有華

資料3 検討の経過

第1回 推進会議

開催日: 2008年6月2日(月)
 内容: ・推進方針、及び推進会議の目的や位置づけの共有
 ・モデル事業の概要説明と協力のお願
 ・全体スケジュールの確認/方針に対する意見交換

第2回 推進会議

開催日: 2008年8月6日(水)
 内容: ・推進方針の内容、体系の検討
 ・モデル事業の進捗確認

学識者会議 2008年9月1日(月)

第3回 推進会議

開催日: 2008年9月30日(火)
 内容: ・推進方針骨子(案)の検討
 ・モデル事業の進捗確認

第1回庁内検討委員会

第4回 推進会議

開催日: 2008年12月2日(火)
 内容: ・推進方針(素案)と推進体制の検討
 ・モデル事業の進捗確認

第2回庁内検討委員会

パブリックコメント

推進フォーラム(1/21)

第5回 推進会議

開催日: 2009年3月2日
 内容: ・パブリックコメント/フォーラムを受けた素案修正の検討
 ・来年度に向けて意見交換

第3回庁内検討委員会

策定・公表 2009年3月下旬



資料4 推進フォーラム・モデル事業等の実施概要一覧

■推進フォーラム

「エコシティたかつ」推進フォーラム	
<p>(第1部) 親子・プレママコンサート</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2009(平成21)年1月21日、11:00～12:00、高津市民館大ホールにて開催(参加者数:556名)。出演:平松あずささん、寒河江克枝さん(音の教室カリヨン) ・親子やプレママを対象に、「エコシティたかつ」や環境のことを楽しく盛り込んだコンサートを開催。
<p>(第2部) 「エコシティたかつ」推進フォーラム～100年後のたかつのまちのために～</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2009(平成21)年1月21日、18:00～20:30、高津市民館大ホールにて開催(参加者数:89名)。 ・プログラム(司会:桜井純恵さん) 「style-3!」ミニコンサート 「私のエコ自慢」団体活動紹介 高津区市民健康の森を育てる会/区民ミニ・ガーデン/ かわさきかえるプロジェクト/高津区まちづくり協議会/ ニヶ領用水ウォッチング・フォーラム 「エコシティたかつ」はこんなまち! 進行/解説:岸由二さん、話し手:桑畑祥生さん/ 鈴木眞智子さん/徳武道雄さん/森守さん (岸先生によるアメリカの環境教育の最新動向のお話“子ども”をキーワードにした座談会。) 「エコシティたかつ」推進方針(案)について 説明:山崎茂高津区長、総括コメント:田中友章さん

■モデル事業・関連事業

ゴーヤーによる「緑のカーテン」大作戦	
<p>①ゴーヤーによる「緑のカーテン」づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・協力してくれる家庭を募集し、2008(平成20)年4月23日と4月24日に講習会を実施(参加者数:104名)。 ・545名にゴーヤーの種、プランター、ネット、作り方のパンフレットを無償配布(内、300名はゴーヤーの種のみ)(2008年4月上旬～6月上旬)。
<p>②フードマイレージゼロ「高津区役所産ゴーヤー」を食べよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・区役所で収穫されたゴーヤーを使った料理を区役所5階「レストランたかつ」(運営:東急ファシリティサービス株式会社)のサービスとして区民に提供。(2008年8月6日、13日、20日、27日)
<p>③放射温度計による「緑のカーテン」の効果測定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・放射温度計を20世帯に無償貸し出し(2008年8月15日～9月12日)。 ・サーモグラフィ、放射温度計による区役所、出張所の「緑のカーテン」測定(温度差0.7～9.5℃)。 ・市民活動見本市2008ブースで測定結果を展示。

④わが家・わがまち自慢「緑のカーテン」コンテスト	<ul style="list-style-type: none"> ・「地域からはじめる地球温暖化対策」をテーマに、写真を募集(応募用紙に必要事項を記入の上、写真2枚を貼付)(募集期間：2008年8月1日～9月12日)。 ・応募者数：55件(個人部門41件/団体部門14件)。 ・2008(平成20)年10月18日に表彰式を開催(市民活動見本市2008内)。ブースで受賞作品を展示。
⑤花と緑のパネル展	<ul style="list-style-type: none"> ・2008(平成20)年12月1日～12月5日、高津区役所1階市民ホールにて、「エコシティたかつ」推進事業の取組や、「緑のカーテン」受賞作品/団体応募作品、環境局「緑のカーテン」大作戦パネル、わがまち花と緑のコンクールパネル、「区民ミニ・ガーデン」写真を展示。
小学校のビオトープ整備(学校流域プロジェクト)	
久地小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・久地小学校校庭南側のビオトープを再整備。
西梶ヶ谷小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・西梶ヶ谷小学校校舎裏に新たにビオトープを整備。
高津区役所のエコシティホール化	
壁面緑化	<ul style="list-style-type: none"> ・高津区役所東側の外壁を、在来種テイカカズラとスイカズラで緑化。
ビオトープ整備	<ul style="list-style-type: none"> ・区役所地下駐車場入口付近にビオトープを整備。
屋上緑化	<ul style="list-style-type: none"> ・区役所4階テラスにコケ植物による屋上緑化を実施。
視察対応等	<ul style="list-style-type: none"> ・屋上緑化について、小学生や他都市など6件の視察の受入を行い、うち2件が実際に施工。
その他の関連事業等	
使用済てんぷら油を活用した資源循環プロジェクト (2008年度高津区協働事業)	<ul style="list-style-type: none"> ・「かわさきかえるプロジェクト」の提案による、使い終わったてんぷら油で石けんを作る事業(2008年度高津区協働事業提案制度)。2008(平成20)年9月から区役所と協働で事業化するプロジェクトを開始。 ・回収ポイント27か所(2009年1月現在)。6か月間で月平均187リットルの油を回収(総量1,122リットル)。 ・「きなりっこ」の普及促進に向けたイベントや講座等開催。 ・先行事例(墨田区、相模原市)を視察。
電気自動車(EV)の利用実証試験	<ul style="list-style-type: none"> ・2008(平成20)年10月9日～11月28日、東京電力株式会社と富士重工業株式会社が共同開発した電気自動車(EV)を神奈川県より借り受け、利用実証試験を実施。

<p>「歩こう、知ろう！高津の水と緑」 プロジェクトスタートイベント</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2008（平成20）年9月12日、高津区役所5階会議室にて開催（参加者数：64名）。主催：高津区まちづくり協議会。 ・プログラム 講演：「水と緑のあるまちをめざして」 講師：岸由二さん（慶応義塾大学教授） 報告：多摩区内緑地調査活動の経験 報告者：中島光雄さん（たまよこネット代表） 活動の提案：始めよう「区内緑地探検調査隊」活動 小磯盟四朗さん（プロジェクトリーダー）
<p>岸由二先生と緑地資源観察会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2008（平成20）年11月27日、高津区市民健康の森にて開催（参加者数：17名）。主催：「エコシティたかつ」推進会議、高津区まちづくり協議会、高津区役所。 ・岸由二先生に高津区市民健康の森の自然や管理方法について説明してもらいながら、緑地を観察。
<p>古着の回収</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2008（平成20）年11月10日～11月14日、高津区役所で古着を回収（宮前生活環境事業所と連携）。 ・各日平均2トン車2台分を回収。
<p>みんなが“MY BAG”持参キャンペーン（マルイファミリー溝口）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・マルイファミリー溝口による寄付キャンペーン。食品売り場「マルイ食遊館」でレジ袋辞退1件につき5円を、NPO法人多摩川エコミュージアムと高津区の環境まちづくり事業へ寄付（2008年3月16日開始）。 ・寄付総額は264,550円（2009年1月1日現在）。
<p>高津区の流域地形模型</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・明治大学田中友章研究室の協力のもと、高津区の流域地形模型を製作。
<p>駐日英国大使館との意見交換会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2009（平成21）年1月29日、駐日英国大使館において、クレア・ホーリー英国環境・農村地域省気候変動適応プログラム副ディレクターと岸由二先生等とで、気候変動についての意見交換を実施。
<p>2009 川崎発！ストップ温暖化展</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2009（平成21）年3月20日、溝口駅前キラリデッキにて開催（来場者数：約3,000人／スタンプラリー参加者数：約600人）。主催：川崎発！ストップ温暖化展実行委員会、共催：川崎市、「エコシティたかつ」推進会議。 ・企業や市民グループ等のブース出展やグリーン電力コンサート、学習会を開催。

■ホームページの開設

http://www.city.kawasaki.jp/67/67tisin/eco_city/index.html



資料5 用語の説明

【あ行】

インセンティブ

誘因、または目標を達成するための刺激のこと。

エコエナライフ

ごみを減らしたり、再利用を心がけたり、水を汚さないで大切にしたりするなど、環境に配慮した生活スタイル。

えぬびーおー N P O

NonProfit Organization(民間非営利組織)。様々な分野(福祉、教育・文化、まちづくり、環境、国際協力など)でボランティア活動などの社会貢献活動を行う、営利を目的としない団体の総称。このうちNPO法人とは、特定非営利活動促進法(NPO法)に基づき法人格を取得した特定非営利活動法人の一般的な総称である。

温室効果ガス

大気を構成する気体であって、赤外線を吸収し再放出する気体。京都議定書では、二酸化炭素(CO₂)、メタン(CH₄)、一酸化二窒素(N₂O)、ハイドロフルオロカーボン(HFC_s)、パーフルオロカーボン(PFC_s)、六ふっ化硫黄(CF₆)、の6物質が温室効果ガスとして削減対象となっている。

【か行】

カーボン・オフセット

日常生活や経済活動において避けることができない二酸化炭素(CO₂)等の温室効果ガスの排出について、まずできるだけ排出量が減るよう削減努力を行い、どうしても排出される温室効果ガスについて、排出量に見合った温室効果ガスの削減活動に投資すること等により、排出される温室効果ガスを埋め合わせるという考え方。

カーボン・チャレンジ川崎エコ戦略(CCかわさき)

市民や事業者など川崎市の多様な主体が一丸となって取り組む温暖化戦略。2008(平成20)年2月、阿部川崎市長が記者会見で発表。この戦略の基本的な考え方は、環境と経済の調和と好循環を推進し、持続可能な社会を地球規模で実現するため、全市をあげて取り組むことである。3つの柱、1. 川崎の特徴・強みを活かした環境対策を進めます 2. 環境技術による国際貢献を進めます 3. 多様な主体の協働によりCO₂削減に取り組みますを中心にして、活動を展開していく。

がいせん 崖線

台地などの平坦面から谷底面に向かう崖状の斜面が、川に沿って連続している地形や場所をさし、斜面緑地として残っている場合が多い。また、湧水がある場合もある。

かすみでい 霞堤

堤防のある区間に開口部を設け、その下流側の堤防を堤内地側に延長させて、開口部の上流の堤防と二重になる

ようにした不連続な堤防。戦国時代から用いられており、霞堤の区間は堤防が折れ重なり、霞がたなびくように見えるようすから、こう呼ばれている。

かわさきコンパクト

川崎市は日本の自治体として初めて国連グローバル・コンパクト(UNGC)に2006(平成18)年1月に参加した。UNGCはアナン前国連事務総長の提唱によって始まった、参加する世界各国の企業や団体に対して、人権、労働、環境、腐敗防止の4分野・10原則を支持し、実践するように呼びかけるプログラムであり、川崎市ではその理念の市内展開として、「かわさきコンパクト」を2006年度から提唱している。企業・事業活動に際し人・環境にやさしい取組を目指す9つの宣言である「ビジネス・コンパクト」と、市民活動で川崎のまち・人・自然を大切にす3つの宣言である「市民コンパクト」が同時に展開されるのが「かわさきコンパクト」の特徴である。

川崎再生 ACTION システム

川崎市において大きな課題である行財政改革の着実な推進と新たな総合計画の策定に寄与することを目的として、2003(平成15)年度から全ての事務事業を対象として行財政改革の視点から点検を行う新たな評価制度(事務事業総点検)を構築した。2005(平成17)年度からは、自治基本条例が制定されたことと新総合計画～川崎再生フロンティアプラン～が策定されたことを踏まえ、事務事業総点検の主な目的を行財政改革の推進から総合計画の着実な推進にシフトして実施している。また、事務事業の進行管理だけでなく、成果を的確に把握し、市政運営におけるPDCAサイクルの確立を図ることと、市民への説明責任を果たすことなどを目的に、施策評価を新たに実施している。

川崎市役所環境管理システム(エコオフィス計画)

川崎市内最大の事業体である市が率先して計画的、体系的に環境保全活動を推進することを目的に策定した<第1次:1999(平成11)年4月策定/第2次:2001(平成13)年4月改訂/第3次:2006(平成18)年4月改訂>。川崎市環境基本計画第6章の環境配慮指針を基本とし、定量的な管理が可能な項目を対象とする。地球温暖化対策推進法第21条により、地方公共団体は、温室効果ガス排出量削減のための実行計画を策定することを求められているが、この計画は実行計画に求められる事項を包含する。2010(平成22)年度の温室効果ガス総排出量を2004(平成16)年度に対し6%削減することや、物品やサービスの購入、エネルギー・資源の使用、廃棄、公共工事などの実施に当たって環境に配慮することを目標に掲げている。

川崎市環境基本条例

環境の資源としての有限性を認識し、その適正な保全及び活用を期するとともに、川崎市の環境政策の理念及び

基本原則、環境施策の基本となる事項及びその施策の策定に関する手続等を定めるところにより、良好な都市環境の保全及び創造を図り、もって市民の福祉に寄与することを目的とする<1991（平成3）年12月制定>。環境政策の理念に、1. 市の環境政策は、市民が安全で健康かつ快適な環境を享受する権利の実現を図るとともに、良好な環境を将来の世代に引き継ぐことを目的として展開するものとする 2. 市は、市民及び事業者と協力して、環境資源を適正に管理し、良好な環境を総合的かつ持続的に創造することにより、現在及び将来の市民生活の質的向上を図るものとする 3. 市の施策は、環境政策を基底として、これを最大限に尊重して行うものとすることを掲げ、市の環境政策は5つの基本原則、(1) 施策の総合性、(2) 科学的予見性、(3) 生態系への配慮、(4) 地球環境への配慮、(5) 市民の参画と協働 に従うものとしている。他に、環境基本計画、環境行政の総合的調整、環境審議会について定めている。

川崎市環境基本計画

川崎市環境基本条例の理念の実現に向けて、第8条の規定に基づき、市の環境行政を総合的かつ計画的に推進するため、川崎市基本構想及び川崎市総合計画を踏まえて策定した<1994（平成6）年2月策定/2002（平成14）年10月改訂>。対象期間を2010（平成22）年度までとし、環境政策の目標となる全市の望ましい環境像として、「人と環境が共生する都市・かわさき」と定め、3つの環境像、1. 健康な市民生活が営める安全のまち、2. うるおいとやすらぎのある快適なまち、3. 地球環境にやさしい持続可能な循環型のまちから形成されている。7つの重点分野（大気汚染の低減/化学物質の環境リスクの低減/緑の保全・回復/地球温暖化防止対策の推進/資源の有効活用による循環型地域社会の形成/環境教育・環境学習の推進/市民・事業者・市のパートナーシップの構築）において、重点目標と重点的取組事項を掲げている。

川崎市新総合計画～川崎再生フロンティアプラン～

低成長経済への移行や少子高齢化の急速な進行、さらにはこれに起因する人口減少過程への転換など、我が国全体における社会経済環境が大きく変化する中、川崎市が進めるまちづくりの基本方針である総合計画として、時代状況に的確に対応するとともに計画事業の実行性にも配慮しながら、2005（平成17）年に策定した。基本構想と実行計画の2層構造からなり、基本構想は、これから川崎市が進めるまちづくりの基本方針として、市政運営や政策の基本方向を掲げる具体性を持った10年程度の計画とし、実行計画は、基本構想に基づく施策の具体的な取組内容及び目標を明示した3か年の計画としている。2008（平成20）年度からの第2期実行計画（～2010年度）を推進している。『「誰もがいきいきと心豊かに暮らせる持続可能な市民都市かわさき」をめざして』をまちづくりの基本目標とする。

川崎市自治基本条例

川崎市における自治の基本理念と自治運営の基本原則を確認し、自治運営を担う主体である市民、議会及び市長その他の執行機関の役割、責務等を明らかにするとともに、行政運営、区の在り方、自治運営の基本原則に基

づく制度等本市の自治の基本を定めることにより、市民自治を確立することを目的とする<2004（平成16）年12月制定>。基本理念として、(1) 市民は、地域社会の課題を自ら解決していくことを基本として、その総意によって市を設立し、地域社会における自治の一部を信託していること (2) 市民は、その信託に基づく市政に自ら主体的にかかわることにより、個人の尊厳と自由が尊重され、市民の福祉が実現される地域社会の創造を目指すこと (3) 市は、国及び神奈川県と対等な立場で相互協力の関係に基づいた自律的運営を図り、自治体としての自立を確保すること を掲げ、市民自治の確立を目指す。また、3つの原則、(1) 情報共有の原則、(2) 参加の原則、(3) 協働の原則に基づき自治運営を行い、市は、参加又は協働による自治運営に当たっては、参加又は協働をしないことによって、市民が特別の不利益を受けることのないようにする。他に自治運営を担う主体の役割、責務等、自治運営の基本原則に基づく制度等、国や他の自治体との関係について定めている。

川崎市地球温暖化対策地域推進計画

1998（平成10）年10月に「川崎市の地球温暖化防止への挑戦～地球環境保全のための行動計画」を策定し、実効的な削減目標を掲げ、より多くの主体が参加できる計画に見直すため、2004（平成16）年3月に「川崎市地球温暖化対策地域推進計画～川崎市の地球温暖化防止への挑戦」に改訂した。地球温暖化防止対策の推進は、川崎市環境基本計画（2002年10月改訂）の重要分野の一つに掲げられ、地球温暖化対策推進法（2002年5月改正）第20条に定める地域推進計画に位置づける。2010年における二酸化炭素等の排出量を1990年レベルに比べ6%削減することを目指す。

川崎市緑の基本計画

1995（平成7）年度に策定した緑の基本計画「かわさき緑の30プラン」を、少子高齢社会に向け、市民や事業者との協働、連携により、誰もが緑を実感できる生活空間の実現を目指して、2008（平成20）年3月に改定した。川崎市新総合計画や川崎市環境基本計画、川崎市都市計画マスタープランなど関連計画と密接な関わりをもち、計画期間は2008（平成20）年度から2017（平成29）年度まで（おおむね10年間）とする。「多様な緑が市民をつなぐ 地球環境都市かわさきへ」を基本理念とし、5つの緑の将来像と基本方針、また12のプロジェクトとその方向性、区別方針を示している。

環境マネジメント

事業者が自主的に環境保全に関する取組を進めるに当たり、環境に関する方針や目標等を自ら設定し、これらの達成に向けて取り組んでいくこと。

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）

1988（昭和63）年に、国連環境計画（UNEP）と世界気象機関（WMO）により設立。地球温暖化に関する科学的・技術的・社会経済的な評価を行い、得られた知見を政策決定者を始め広く一般に利用してもらうことを任務とする。5～6年ごとに地球温暖化について網羅的に評価した評価報告書を発表するとともに、適宜、特別報告書、方法論報告書を発表している。

京都議定書

2007（平成19）年12月に京都で開催された気候変動枠組条約第3回締結国会議（COP3）において採択された議定書。先進各国の温室効果ガスの排出量について法的拘束力のある数値目標が決定されるとともに、排出量取引、共同実施、クリーン開発メカニズムなどの新たな仕組みが合意された。2005（平成17）年2月に発効。

京都議定書目標達成計画

地球温暖化対策の推進に関する法律第8条に基づき、2005（平成17）年4月閣議決定された、京都議定書による我が国の6%削減約束を達成するために必要な対策・施策を盛り込んだ計画。2002年～2004年、2005年～2007年、2008年～2012年の3ステップで進められる。

協働

異なる特性のもつ主体同士が共通の目標に向かって、それぞれの役割と責任の下で相互の立場を尊重し、対等な関係に立って協力するもの。

コーポラティブ住宅

共同住宅などを建てるために入居希望者が共同して計画段階から参加し、専門家とともに、土地、購入、設計、工事発注などを自分たちで行う方式による住宅。

【さ行】

再生可能エネルギー

太陽がある限り地球が存在し、地球上で絶えることない再生可能なエネルギー。太陽光や風力、水力、バイオマス、地熱などがある。

市街化区域

都市計画法に基づく区域区分の一つ。既に市街地を形成している区域及びおおむね10年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき区域のこと。神奈川県が定める。

市街化調整区域

都市計画法に基づく区域区分の一つ。市街化を抑制すべき区域。神奈川県が定める。

社会関係資本（Social Capital）

アメリカの政治学者、ロバート・パットナムによると、人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「互酬性の規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴のこと。Social Capitalを社会関係資本と訳すのは、従来、道路などの社会的インフラストラクチャーを意味する社会資本との混同を避けるためである。

水系

ある河川の本川、支川、派川、及びこれに連なる湖沼を合わせたもの。

生産緑地地区

都市計画法に基づく地域地区の一つ。市街化区域内にある農地の農業生産活動等に裏付けられた緑地機能に着目し、公害や災害の防止などに効果のある農地を計画的

に保全することにより、良質な都市環境の形成を図ることを目的に定めるもの。生産緑地地区に指定された農地は、税制面での優遇を受けられるため、農業の継続がしやすくなるが、その一方で、農地保全の観点から建築や宅地造成等の行為は農業用や公共施設等の設置に限定される。

生物多様性

自然生態系を構成する動物、植物、微生物など地球上の豊かな生物種の多様性とその遺伝子の多様性、そして地域の様々な生態系の多様性をも意味する包括的な概念。生物多様性の保全とは、様々な生きものが相互の関係を保ちながら、本来の生息環境の中で繁殖を続けている状態を保全することを意味する。

生物の多様性に関する条約（生物多様性条約）

生物の多様性の保全、その構成要素の持続可能な利用及び遺伝資源の利用から生ずる利益の公正かつ衡平な配分を目的とする。1992（平成4）年に採択され、1993（平成5）年12月に発効した。日本は1993（平成5）年5月に締結した。条約に基づき生物多様性国家戦略を策定。

生態系

川、沼、水田、山林など、あるまとまりを持った自然環境と、そこに生息するすべての生きもので構成される一体の環境をいい、これらをとりまく非生物的環境要因（太陽光、降雨、その他）も含む。

生態系の攪乱

土壌・海洋汚染など人為的な環境破壊や移入種によって生態系が乱されることをいう。

セーフティネット

安全網のこと。一般に万一の場合に備える社会的制度を指す。社会保護や年金、健康保険、雇用保険などがあり、憲法25条の「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という条文を担保するものといえる。

【た行】

第三次生物多様性国家戦略

生物多様性条約第6条に規定されている生物多様性の保全と持続的利用のための国家的な戦略あるいは計画として策定されたもので、日本の生物多様性施策の方針などを示した戦略（2007（平成19）年11月に閣議決定された）。第1部の戦略は、私たちの暮らしを支える生物多様性の重要性を解説するとともに、顕在化しつつある地球温暖化の影響について新たに記述している。また、生物多様性から見た国土の望ましい姿のイメージを、過去100年の間に破壊してきた国土の生態系を100年かけて回復する100年計画として提示するとともに、地方・民間の参画の必要性を強調し、それらを踏まえた上で、今後5年程度の間に取り組むべき施策の方向性を4つ基本戦略としてまとめた。第2部の行動計画では、体系的・網羅的に具体的施策を記述した上で、今回初めて、生物多様性の認知度を30%から50%以上とする、ラムサール条約湿地を10か所増やすなどいくつかの数値目標を設定するとともに、実施省庁を明記した。

定期借地権

1992（平成4年）8月に施行された借地借家法により誕生。契約で定めた借地期間の満了後は、契約の更新がなく確定的に終了する借地権。借地借家法に、一般定期借地権、建物譲渡特約付借地権、事業用定期借地権の3種類が規定されている。

都市計画マスタープラン

「都市計画法第18条の2に基づく「市の都市計画に関する基本的な方針」として、議会の議決を経て定められた市の「基本構想」と、県が定める「都市計画区域の整備、開発及び保全の方針」に即して定めるもの。個別の細やかな計画事業の内容そのものを直接決めるものではないが、今後、市が定める都市計画は、この都市計画マスタープランに即して定めることになる。

【な行】

農住組合

三大都市圏を中心とした地域の市街化区域内農地の所有者等が協同して、必要に応じて当面の営農を図りつつ、当該農地を良好な住宅地等へ転換するため、良好な住宅地等の造成を目的として農住組合法の規定により設立される法人をいう。

【は行】

バイオディーゼル（BDF）

廃食用油等の植物性油脂等をメチルエステル化して得られる液体燃料。

ヒートアイランド現象

都市域において、人工物の増加、地表面のコンクリートやアスファルトによる被覆の増加、それに伴う自然的な土地の被覆の減少、さらに冷暖房などの人口排熱の増加により、地表面の熱収支バランスが変化し、都心域の気温が郊外に比べて高くなる現象をヒートアイランド現象という。この現象は、都市及びその周辺の地上気温分布において、等温線が都市部を中心として島状に市街地を取り巻いている状態により把握することができるため、ヒートアイランド（熱の島）といわれる。

ビオトープ

ドイツ語で生物生息空間のことだが、一般に自然またはそれに近い動植物の生息場所のことをいう。道路、河川、湖沼、流域、農村地域など地理的に区分された地域で、自然の状態の、できるだけ価値の高い生物群集が存在する生息空間を意味する。生物量の豊富な河川や水辺空間やそれに接する浸水部分などがこれにあたるが、最近では線的なつながりをもつネットワークを対象とすることも多くみられる。近年、公園や学校の校庭、ビルの屋上、調整池などに池などを人為的に作り、まちの中で生きものとふれあえる環境づくりの方法として様々なビオトープができている。

【ま行】

まちの小さなダム

コンクリート化が進んだ都市部では、集中豪雨で下水道から下水が逆流し、都市型洪水が発生している。屋根に

降った雨を溜めることは、こうした都市型洪水の軽減にもなり、また、災害の際、溜めた雨水は代替水源にもなる。一戸で溜められる雨の量はわずかでも、それが無数に集まれば、ダムに匹敵するといわれている。

溝口駅周辺地区緑化推進重点地区計画

川崎市緑の基本計画及び川崎市緑の保全及び緑化の推進に関する条例に基づき、市域において緑地の整備及び都市緑化などを重点的に推進する地区であり、2001（平成13）年9月に川崎市環境保全審議会の答申を受け9つの地区が指定された。川崎駅周辺地区、小杉地区、新百合丘地区に続き、2008（平成20）年3月、溝口駅周辺地区の計画が策定された。緑化推進のテーマを、「緑と水でつなぐ 歴史街道 花街道」とし、5つの基本方針と目標が設定された。

かいろ 緑の回廊（コリドー）

一般的には、野生生物の生息地間を結ぶ、野生生物の移動に配慮した連続性のあるネットワークされた森林や緑地などの空間を言い、生態系ネットワーク、あるいは単にコリドーなどとも言われている。狭義には、林野庁が国有林において生物多様性保全策の1つとして進めている、今までに指定した様々な保護林と、その間をつなぐ森林を新たな保全林とし、「保護林ネットワーク」をつくる事業を指す。

モニタリング

通常は監視の意味で用いられるが、自然環境の関係で用いられる場合は、地域の自然環境の状況について継続的、あるいは定期的に調査を実施することをいう。

【や行】

やと 谷戸

台地や丘陵地が湧水などの浸食によって複雑に刻み込まれた地形をいう。雑木林からわき出た湧水と清流が特徴。この清流を集めて古くから谷戸の水田（谷戸田）が行われてきた。このような雑木林、清流、水田のある谷戸の環境は、多様な生きものが生息する地域である。地域によっては「谷津」「谷地」とも呼ばれている。

ゆうすい 湧水

泉とも呼ばれ、地中にある地下水が自然に出口を見つけて湧き出したものをいう。

【ら行】

ランドスケープ

地形を基本とした景観のことをいう。流域の河川景観においては、山、水面、植生などの自然物と、それに人為的な作用を受けた土地及び建物や土木構造物から構成される。

流域

地表水の場合、集水域ともいい、降水が分水界（川の流域の境界）によって分けられて河川に流れ込む区域。地下水の場合にも、地下帯水層内での分水界によって地下水流域が形成されている。自然の水循環系を考える際の基本単位



「エコシティたかつ」推進方針

2009年3月

発行 川崎市
事務局 川崎市 高津区役所 区民協働推進部 地域振興課／企画課
〒213-8570 川崎市高津区下作延 2-8-1
電話 044-861-3134 FAX 044-861-3103
電子メール 67tisin@city.kawasaki.jp